
正義の味方と神なる力

春ノ風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の味方と神なる力

【Nコード】

N2883S

【作者名】

春ノ風

【あらすじ】

正義の味方を目指す男は有りえぬ場所に降り立った。その地の名は檣鹿。“ナラカ”とはインドで地獄を意味するという。故に、男は三度目の地獄に身を投じることとなる。だが、同時に男は願い続けた奇跡と対面する。

「序」(前書き)

またまた新しい小説に手を出してしまった。他の小説が終わる目処は立っていないというのに。まあ、全部書き終えるように頑張るの
でどうか応援よろしくお願いします。by春ノ風

「序」

「さて、今日から君たちはこの檜鹿高校で一年を過ごし．．．．．」

体育館の舞台の上で教頭先生が入学式の挨拶を続けている。

入学式 日本では例外はあるものの、ほぼ全員が高校へ進学する。そんな中、俺こと衛宮士郎は二度目の高校の入学式を経験している最中である。

+ + +

とある森の中にあるとある小さな家。その家の前に一人の女性が立っている。

「士郎！いる？」

そつけたたましくドアをぶち破りずかずかと家の中へ入って来る女性。その開け方はらしいと言えらしいのだが．．．．．

「先生、そうやって毎回ドアを壊さないでください。直す身にもなつて下さいよ」

「あら？ここは私の家なんだし、士郎が勝手に直してるだけじゃない」

一応抗議の声をあげるがこの反応。相変わらずの傍若無人っぷりは彼の金ピカに負けてはいない。

確かにこの家は目の前の女性 ミス・ブルーと呼ばれる世界
で五人しかいない魔法使い、蒼崎青子の隠れ家の一つである。

なぜ俺がそんな魔法使いと一緒にいるかというと、俺が師事をお願いしたからである。

あの聖杯戦争で勝ち残りはしたが、己の力の無さを痛感するには充分であった。故に、力をつけるために戦闘の、いや、破壊のスペシヤリストである蒼崎青子を探し出したのだ。

．．．．．と言ってもそれはもう五年前の話で、今は師弟の関係ではなくただの協力者という関係だ。

「ここは先生が無理矢理俺に作らせた家でしょうが．．．．．。まあ、今はそんなことどうでもいいです。で、今回はなんです？」

どうせ話しても無駄なのは体で理解しているからさっさと切り上げて、本題の方へと移る。

「うんうん、話が早くて助かるわ。実はね、協会から派遣した魔術師が行方不明になったの」

「は？」

意味がわからない。今時協会から逃げ出す者は少ないというのは派遣した魔術師がいなくなっただけで魔法使いに要請するとは。

「まあ、士郎が言いたいことはわかるわ。ただの魔術師なら私のところまで話は来ないわ。問題はその行方不明者が封印指定の執行人

だつてこと」

「え？まさか……………」

「大丈夫、あの人間凶器じゃないから安心しなさい」

先生は俺の心意を知つてか、続けざまにそう話した。それだけ聞いてほつとした。

「そもそもあいつと最後に会つたのは二ヶ月前でしょう？行方不明が出たのはもう去年の話よ」

「じゃあ、誰が？」

「さあ、私も知らないけどなんか将来有望な少年だったらしいわ」

……………なんとも適当な。本当に自分に関わりが無いものには興味がないんだな、この人は。

「……………それで、依頼内容は？」

「何でもその組織に潜入して情報を入手しろだつて。しかも、その条件に出来るだけ破壊せずにつて言うのよ？無理に決まつてるじゃない」

「……………」

何と言うか、色々絶句した。先生にそんなこと出来るわけがないじゃないか。件の封印指定の執行人もそうだが、この人も破壊に特化した魔術師（魔法使い）だというのに。おそらく、先生と俺とが繋

がつているということを知っている遠坂辺りが提言したのだろう。

「わかりました。この依頼俺がやりますから」

「さっすが！助かるわ。じゃあ場所は日本の埼玉県の榎鹿高校つてところだから。よろしくね」

最後にそれだけを言って、先生はこの場から姿を消した。

「．．．．．まるで台風みたいな人だな」

はあ、詳しい事は後で遠坂に聞くとして．．．．．

「とりあえず修理だな」

地下から工具を持ってきて先生が壊したドアの修理に取り掛かる事にした。

+ + +

ようやく入学式を終えて、自分のクラスである一組に戻ろうとするが．．．．．

「しかし凄いところだな」

思わず感嘆を漏らし、辺りを見回してしまう。建物自体の解析は可能だが、この学校にかけられた結界は解析不可。解析は自身の数少ない魔術だが、大概のものなら可能なはず。それなのに違和感程度しか感じられない。

「ということは結界に特化した魔術師が張ったのか？」

顎に手を添えて考える。この檜鹿高校には自分のように異常な魔術を操る者がいるのかもしれない。

「……………早急に動くべきか？」

小さく自問するがすぐにそれは却下される。校内には何十という数の監視カメラがセットされている。そんな中をばれないように動くのは不可能だ。となると……………

「政府関係者とコンタクトを取るべきだな」

協会から得た情報では穴だらけなので、この学校に詳しいであろう人物を探すか。そうやって歩きながら今後の行動指針を立てていると……………

「キャッ!？」

ちょうど丁路地になるところで走ってきた女の子とぶつかってしまった。その女の子は尻餅をつき、『いたた』と囁いている。

「悪い、大丈夫か？」

「……………あ、ありがとう」

尻餅をついている少女に手を差し出す。それに気づいた少女は少しばかり強張った表情で礼を言い、手を取った。

「あ、あの……………」

少女はそのまま苦もなく立ち上がり、どこか緊張した趣きで尋ねてくる。

「一年一組の教室はどこか知っていますか？」

そう問われて一人なるほど頷いてしまう。その問いだけでなぜ少女が全力疾走してるのかも、なぜ緊張しているのかもわかってしまう。要するにこの少女は道に迷っているのだ。

「ふふ．．．．．」

「ああつ、なんで笑うの？」

「いや、すまない。俺も一組だから一緒に行こうか？」

「ええッ！？高校生なの？」

「．．．．．クッ！」

やはり無理があるか？今年で二十二歳。普通に考えれば社会人やつてる年齢だ。だけど今時の高校生は妙に大人びているし、どこかの代行者も高校生やっていたから出来ると思ったのだが．．．．．

「なんて冗談。でも身長高いね。何センチあるの？」

「ん？冗談？」

「うん、だって制服着てるんだから同じ檜鹿の生徒でしょう？」

「あ、ああ。そうだな。えと、君の名前は……………」

「私？私は早乙女あや。あなたは？」

「俺は衛宮士郎。よろしくな」

「よろしく。でも助かった。しーくんと会えなかったら校内をさ迷い続けるところだったもん」

「……………しーくん？誰それ？」

「士郎だからしーくん。いい渾名でしょ？」

眩しいくらいの笑顔で早乙女が続ける。だけど正直しーくんは勘弁してほしい。さすがにこの年でしーくんは恥ずかしい。

クラスまでの道のりでなんとか呼び名をしーくんから士郎くんに変えてもらうことに成功した。そして、他愛もない会話を続けようやくクラスに辿り着いた。

「じゃあね、士郎君」

「ああ」

早乙女と俺の席は少し離れていたので軽く言葉を交わしてそれぞれの席についた。それから少し経つと背の小さな少年と猫耳のような髪型をした少女が走りこんで来てそのまま自分の席についた。それを見送り、再び誰か教室に入って来たようなので目を移すと制服を着ていないところから察するに先生であろうう人が入って来た。

「全員揃っているな？私は一年一組を受け持つ御堂だ」

そう言つて女性は太極に自己紹介を終え、次に話を進めた。

+ + +

御堂の自己紹介を終えると、そのまま休む暇もなくそれぞれ一枚の紙が配られる。

「これから円の中に一文字漢字を書け。各々がこれから始まる戦いに最も相応しく必要だと思う漢字を一つ……な」

戦いにおいて最も必要な漢字。

今この場にはすらすらと必要であると思われる文字を書く者、戦いに必要な文字の意味を考える者、その二つに分けられている。一般に、前者はこの学校が何であるかを理解している者。後者は逆に理解していない者である。だが、衛宮士郎はこの文字を書く意図を知らないがそれでも迷わずボールペンを動かす。衛宮士郎にとってそんな事考える意味などない。なぜなら彼が衛宮士郎である限りそれは永遠に変わらないのだから。

体は“剣”で出来ている

きつとそれはどの世界の衛宮士郎でもそう書いただろう。当然だ。彼そのものが“剣”であるのだからそれは決して変わることのない事項である。だが

「……できたようだ。ではその言葉を口頭せよ」

御堂が次の指示を下す。おそらく他の世界の衛宮士郎ならそれを“ツルギ”または“ケン”と呼んだだろう。しかし、この衛宮士郎は違う呼び名でつぶやいた。いや、つぶやいてしまった。そこにどんな思わくがあったのかは今となってはわからない。だが確かに、間違いない彼はこうつぶやいた。

“セイバー”と。

「始」

それは常識からかけ離れた非常識。阿鼻叫喚の地獄絵図があると言
うのならまさしくこれがそうだろう。人間でも動物でもないモンス
ター。その名は蝕と言う。生徒たちはそれと戦う者、逃げ惑う者、
戦いに負け喰われる者。いつも通りの三パターンに分けられる。

だが、この年で初めてそのどれにも属さない人間が現れた。その名
は

「……ック！早く逃げろ！！」

双剣で蝕の攻撃を受け止めながら、左腕を喰われた少年に叫ぶ。少
年は泣きながら立ち上がり後ろを振り向かず逃げ去ってしまう。

「ちッ！？まだあっちにもいるのか」

蝕を両断し辺りを見回す。校舎の近くには火傷をした少女とそれを
介抱している少女のもとにも三匹の蝕が近寄っている。距離はおよ
そ百五十。距離的に考えれば間に合う訳がない。だが、それは普通
に考えればの話である。しかし、この男にそのような常識は通じな
い。

「 投影、開始 （トレース・オン）」

双剣を破棄し、新たな武器を投影する。黒き洋弓に黒き矢。それは
時間にして一秒にも満たない。同時に矢を放ち、相手に命中するの
におよそ二秒。合計三秒というわずかな時間で三匹の蝕を撃破する。

それを確認した男はそのまま少女たちに声をかけることなく別の蝕のもとへ急ぐ。

その名は魔術使い、衛宮士郎。

+ + +

“空の島”を見、その“文字”を宿すもの

すなわち“戦士”の証なり

この地は不浄の地

神が“蝕”を起こす場所

望み尽きぬ限りここから出る事はまかりならん

太陽と空の島が重なる刻

是、すなわち“神蝕”なり

先生はそう言っていた。でも正直これが何なのかなんてどうだっていい。それよりも重要なのはなんで私がこんな状況に陥っているのかだ。

約束された将来のためにこの学校に入ったのに、入学式当日から命を賭して戦えって？いきなりそんな事言われて誰が出来るのか教えて欲しい。

「アイラちゃんどこ行くの!？」

「わかんないけど．．．」

わからない。六道くんに問われるけどそんな答えわかるわけがない。どこに行っても変な化物だらけなのだから。

だから走る。止まれば餌食になるのは目に見えている。六道くんの手を引っ張って全速力で突っ走る。すると前からわずかに光が照らされる。

「．．．．．外！？とりあえずあそこから」

ようやく外に出れると安堵の息もつかぬまま廊下を走り抜けようとするが．．．．．

「いッ!？」

突然例の化物が壁をすり抜けて進行方向に現れた。

「よっ!！」

化物は私たちを見るやいなやその大きな口で喰らおうとして来たがスライディングをして何とか難を逃れた。

「よし、今のうちに．．．」

逃げよう。そう思ったところでさっきまであった存在感が消えている事に気がついた。まさか!？

「六道くん!？」

後ろを振り向くとやはり六道くんの姿はなかった。だが、その代わり……………

「ペンギン？」

ついさっきまで六道くんの手を握っていたのに、今では頭から草の生えたペンギンのヌイグルミの手を握っている。もう何が何だかわからない。わからないことだらけで頭がパンクしそうだ。

「……………今はそんなこと考えてる場合じゃない!!」

考えるよりも先にヌイグルミを抱いて走り出す。さっき知ったはずだ。止まれば殺される。だけど

「何、……………これ？」

外に出れば逃げれる。頭の悪い私の脳はそんな愚かな希望を懷いていた。

それはまさに戦争のような状況だった。

化物に喰い千切られる生徒たち。逆に武器を手にした生徒に殺される化物たち。

私が生まれて初めて見た戦争は凡そ現代の戦争とは遠くかけ離れていた。

その圧倒的光景に私は後ずさることしか出来ない。

「…………ッ!？」

「あつ」

何かが背に当たる。だが、幸運にも後ろを振り向けば同じ櫓鹿の制服を着た生徒だった。

「えと……ごめんなさい」

「あ、ううん」

笑顔で答えてくれるが、よく見れば表情が青ざめている。それも当然といえば当然か。この様な戦場に放り投げ出されたら誰でもそうなる。

そんな事を考えている内に二匹の化物が近寄ってくる。そんな化物相手に隣の女の子は右手を前に出し、呪文のように一言唱えた。

「『炎』」

「!？」

目を疑った。目の前で大掛かりなマジックを見せられている気分だった。女の子が唱えた瞬間化物がいきなり発火したのだ。

「すごい!すごいすごい!!今のどうやったの？」

「わ、私も初めて使ったから……………。多分、これが文字の力?」

当の女の子本人も困惑してる。文字の力．．．．。ということ
は六道くんがこのヌイグルミに変わったのも文字の力なのかもしれ
ない。

「．．．．．!? キヤアア!？」

化物が燃え尽きホツとしたのも束の間、何の前触れもなく女の子の
腕が自然発火した。それも右腕全体燃えている。

「ま、待って! 今消すから!！」

急いで上衣を脱ぎ、それを使って鎮火作業に移る。ばたばたと力任
せにはためかせ二十秒程でその鎮火に成功した。だが、素人目か
ら見てもそれは酷い火傷だった。

「待ってて、今先生を呼んで．．．．ッ!? 囲まれてる?」

火を消すのに必死になりすぎて忘れていた。ここは未だ戦場だつて
ことを。

「．．．．．うう」

後ろをちらりと見る。とてもじゃないが今の状態では女の子は逃げ
ることは出来そうにない。かといって、近くに助けてくれる人など
見当たらない。それも当然だ。皆が皆自分のことで精一杯なのだか
ら。

「じゃあ、私が．．．!」

そう、自分のことで精一杯ということは私も自分の身を守るために

戦わなければならない。私の『刀』で。．．．．命を賭けて。

少なくともその時の私は戦う準備は出来ていた。文字に願い、私の『刀』も出して、未熟ながらも命を賭ける覚悟もした。でも

「ギヤアアア！」

突如叫び出し倒れる化物たち。一体全体どういふことが全くわけがわからない。それは六道くんも同じよう目で合わせると首を傾げた。

+ + +

それは『始』。曰く、これこそが本当の入学式。この蝕から生き残ることが出来てこそ檜鹿の生徒を名乗ることが出来る。

「．．．．．」

辺りを見回し、空を見る。

「．．．．．もうタイムリミットだな」

あと三分程度でこの神蝕は終わる。

「お、おい、三十（ミン）ー」

ミノが叫び、指を指すのでそちらに目を向ける。

「何だ、ありゃ？」

今生き残っている蝕のほとんどがある一点に集中している。

「仲間割れか？」

その中央からは血飛沫が舞い、また次々と蝕が倒れていく。その光景を見て俺はそんなはずな疑問を口にするがミノによってすぐに両断される。

「違っつて！さっきあの中に誰かが入ってっただんだよ！」

「「はあ？」」

隣にいたノアと一緒に疑念の声を出す。ついでに軽蔑の目も向ける。

「本当だつてば！」

ミノが必死になって言うが到底信じることは出来ない。『始』の蝕は確かに弱い。誰が好んであのような死地に突入しようというのか。そんな馬鹿なことをする人間がいるならぜひ教えて欲しいくらいだ。

そして、ようやく太陽の光が大地を差し、蝕が消え始める。

神蝕の終わりが告げられた。

生き残った生徒の大半が自分の生を喜び泣いている。だが、俺たちは見た。今まで蝕が群がっていた場所の中心で倒れた女生徒を見下ろす血まみれの男を……。男は今にも悲しみに泣きそうになっている。おそらく男にとって大切な人だったのだろう。

「行くぞ。ノア、ミノ」

だが俺たちには関係ない。所詮は無関係の他人の死。そんなことでいちいち気に病んでいたら生き残ることが出来ない。俺たちは振り返りグラウンドを去る。

二十という蝕の中で唯一生き残った“異常”に目を向けずに。

入学者数	205名
死亡者数（初日）	42名
生存者数（初日）	163名

「朝」

目を閉じればいつだって蒼と銀を基調とした鎧を着た一人の少女が立っている。

彼女と過ごしたのはたったの二週間だった。だけど、彼女の姿も、彼女の仕草も、彼女の声も忘れたことは一度たりともない。

風に揺れる彼女の髪は太陽よりも綺麗な黄金色。

瞳はどんな宝石よりも勝っている翡翠色。

まさに『美』という言葉をそのまま象ったような美貌。

思えば、あいつと初めて会ったその瞬間から俺の心はあいつに奪われていたんだ。だから

“ シロウ、貴方を愛している ”

だから、あいつに答えを聞かせてやれなかったことをいつまでも悔やんでいる。

「 セイバー、俺もお前を愛している 」

たった一言。俺はそれだけを伝えればよかったのに
. 右腕に刻まれた文字を見ながらそんなこと思っている内に夜が明けていた。

+ ? + ? +

朝、食堂へ行くとそこは大勢の生徒で賑わっていた。いや、少し違うか。確かにたくさん生徒がいるがほとんどの生徒が恐怖を抱きながら、だが、もう逃げられないという諦めを持って朝食をよそっている。

「…………ふう」

俺もその列に加わり適当なおかずを選んで自分の皿に乘せていく。昨日はなんだかんだで忙しくて夕食を食べることが出来なかったからここで食べる料理は初めてだ。何でもそこらの一流ホテルよりもレベルが上だと言う。

「ため息ついてると幸せ逃げちゃうよ？」

声のする方へ目を向けるとそこには眩い笑顔で「おはよう」と挨拶する早乙女がいた。

「早乙女！無事だったのか」

「うん、何とかね。でも昨日士郎くんが来なかったから心配したんだよ」

そのまま早乙女は俺の隣に並び料理を自分の皿に盛っていく。

「それは悪いことした。昨日は怪我人の手当をしてたから夕食は食べていないんだ」

「え？士郎くんも保健室にいたの？」
？

「最初は保健室にいたけど、さすがに全員が全員保健室に入れるわけじゃないから外で怪我人の治療をしてた。といっても応急処置程度だけだな」

「へえ、すごいな士郎くんは．．．．．。それに比べて私は何も出来なかった．．．．．」

．．．．．暗い顔だ。俺はこの顔をよく知っている。あの戦いで生き残った、でも死んだ生徒もいる。生き残ったということは他の生徒を見殺しにして自分を生かした。きっとこの子も忘れないだろう。あの怨嗟を．．．、あの地獄のような光景を．．．．．

「それで充分じゃないかな？」

「え？」

忘れるとは言わない。俺もあの地獄はいつまでも覚えていて。だけど、だからといって後ろ向きになる必要はない。

「何も戦えなんて言わない。戦おうが、逃げようが早乙女はこうして生きているんだ。なら君はその生を喜ぶべきだ」

「．．．．．強いね、士郎くんは」

「強い、か．．．．．」

「え？」

「いや、何でもない」

俺が本当に強ければあの少女は助けられた。力がないのは俺も同じだ。俺は切嗣のように誰かを救う正義の味方じゃない。

「…………と、それは言いとして随分食べるな」

早乙女がトレイに盛っている料理の量は男の俺を超えている。

「ち、違うよ！これはしーちゃんの方も入ってるんだよ！」

頬を赤らめながら抗議する早乙女。それにしてもしーちゃんって誰だ？もしかして俺？

「あ、しーちゃんっていうのは同部屋の坂崎志絵っていう子のこと」

「しーちゃんって坂崎のことだったのか」

「あれ、士郎くんしーちゃんのこと知ってるの？」

「ああ、坂崎は昨日治療したやつの人だからな。それにしても坂崎はそんなに具合悪いのか？」

確かに彼女の火傷は酷かった。でも会話しているときも時折笑みを見せていたし、彼女の友達が来たときも明るく振る舞っていた。

「うん…………、しーちゃんなかなか寝付けなかったみたいでさつき寝たところなの」

それも当然か、と一人で納得する。いくら明るく振る舞おうとも心の底に刻まれた傷はそうやすやすと癒されることはないし、坂崎の場合、事情が事情だからな。

「そつか．．．．．。ならこれ渡しといてくれないか？」

ポケットから取り出したのはここに来る前に調合した塗り薬。一年は櫓鹿から出れないと聞いていたので準備は万全である。

「いいけど、これ何？」

「火傷の塗り薬だよ。女の子なんだから火傷の痕は消さないと駄目だろ？」

「うん、そだね。ありがとうーちゃんとしーちゃんに渡すね」

本当に嬉しいのだろう、今日一番の笑顔で礼を言い、塗り薬をポケットに詰め込んだ。

「じゃあ、時間がないからもう行くね」

「ああ。また後で」

俺はまた軽く挨拶だけして、早乙女が食堂を出るのを見送り空いている席を探した。その際に

「うわあ、六道くん。あそこに猫がいるよ」

「本当だ。こんなところにも猫っているんだ」

もはや戦場と化したこの学校でこういった他愛もない会話を聞いて少し苦笑した。

+ ? + ? +

「おい、猫なんてどうだっていいだろ？早く飯食って教室行こうぜ」
一体猫のどこに感動できるのかわからないが、二人は満足そうな笑みをこぼしている。さっきまでの元気のなさはどこにいったんだよ。うげ、パセリが入ってる。とりあえずこれは端に寄せよう。

「あれ、日向くんパセリ食べないの？」

「パセリなんてふつつ食わねえだろ？マズイし」

パセリっていうのはバランスみたいなもんだからな。食う必要はない。
．はずだ。

「そういう比良坂だってニンジン残してるじゃないか」

「あ．．私ニンジン苦手で」

まあ、誰だって好き嫌いあるんだ。これは当然のことなので追求はしない。

「ダメだよ！二人とも好き嫌いしてるとうるさくなれないよ」

それだけを言うと六道はもしかやもしかと食事を続ける。肉も野菜も全部。こいつには食べ物で好き嫌いはないらしい。

「．．．．．」

一方、俺と比良坂は言葉を失った。後で比良坂に聞いたことだが比良坂は俺と同じことを考えていたらしい。

好き嫌いしなくても大きくなれないやつはいるんだ。というか栄養はどこに消えたんだ？

「朝」(後書き)

* バランとは弁当のおかずとおかずの境界にある緑色のアレです・
多分。*

「猫」(前書き)

いいペース．．．かな？今さらだけど『アホリズム』って知られてるのかな？Fateやネギまとかと違ってマイナーだからな……

「猫」

朝早くに教室に入ると誰もいない。やはり四十分前では誰も教室に来たがらないらしい。しかし、すごいな。昨日あれだけ人が死んだのに血痕どころかシミ一つない。一体どうなってるんだ？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まあ、疑問に思っても誰も答えてくれる人はいないので考えるのは止めて今日の授業の確認でもしようかな。

「ええと、国語だろ。数学に日本史。それに・・・・・・・・」

いかん。三十秒で終わった。もう何もやることなくってしまった。というか普通に学生してるな、俺。こんなところ遠坂や先生に見られると馬鹿にされて笑われる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・クス」

不意に聞こえた笑いを漏らす声。それに体が反応して後ろを振り向く。

「！？ 何でお前がここにいるんだ、レン！？」

そこには雪のように滑らかな白い髪に俺がプレゼントしたピンク色のリボンをつけた紅い眼の少女が立っていた。

「どうしてなんて聞く必要ないでしょ？ 私たちはマスターの使い魔なんだから」

いや、それはそうだが俺が聞きたいのはまた別のこと何だが．．．
．．。

「何で櫛鹿の制服着てるんだ？」

「ああ、これ？．．．．．フフ、似合うかしら？」

そう言つてレンはグルリと回る。その時スカートが持ち上がるものの中まで見えることはなかった。．．．．．見えてたら見えてたで俺は人間失格の第一歩を踏むところだった。．．．．．
．ハツ。何やら痛い視線を感じる。というかこの教室には俺を含めて二人しかいないので残りの一人の表情を見してみる。

「何考えてるのよ、助平」

「考えていないし助平でもない！」

「．．．フフ、そうね。マスターは甲斐性なしの唐変木なものね」

「．．．．．」

仮にも俺はお前のマスターなのにその言い草はないんじゃないのか？

「それにしても本当に何で櫛鹿の制服着てるんだ？」

黒レンの時は俺の後ろについて来ていたが、白レンの時はどうも自由奔放過ぎる。だから、櫛鹿に来る前も結局会うことが出来ずに来たのだが．．．。

「これを着てるのは私が櫛鹿の生徒だったからに決まってるじゃない」

「ああ、そうか。．．．．．って、ええ!？」

「何をそんな馬鹿みたいに驚いてるの？」

「驚きもするさ。でも一体どうやって俺が櫛鹿に来るって知ったんだ？」

俺が櫛鹿に来ることを知ってるのは先生や遠坂といった限られたごく僅かな魔術師のみ。それをどうやって？

「ミス・ブルーに聞いたわ」

「．．．．．」

そうだよ。どれだけ言っても自分さえ面白けば他人に言っちゃうもんねあの人は。

「．．．．．ん？生徒だった？どういうことだそれ？」

今さらだがレンの言い方に妙な違和感を覚える。だってそれではまるでレンが．．．．．

「答えは簡単よ。私もう死んでるから」

なんてとんでもないことをこの娘は平気で言い放つ。

「ああ、でも誤解しないで、マスター。死んでるじゃなくて死んで

ることになつてただけだから」

「……………八？」

「最初から説明するとね、昨日文字をもらつたじゃない。その後、一人の生徒がクラスを牛耳ろうとして先生を殺して力でまとめちゃつたの。しかも絶対服従しろとか言うことを聞かなければ殺すなんて言う始末よ？どこの馬の骨かもわからない人間の指図を受けるなんて私のプライドが許さないわ」

「……………愚痴が酷い。けっこう溜まっていたんだな。辛辣とは思っていたけどここまで酷く言われたことはないしどこぞの凶悪シスターに比べればまだ可愛げがあるものだ。……………というかレン。何故俺の足に腰掛けるんだ？別に重くはないがそこらには一杯椅子があるんだぞ？」

「それで魔術を使って殺された幻を見せたのか？」

「ええ、そうよ。別に返り討ちにしてもよかったんだけどこっちの方が動きやすいじゃない。……………士郎にいつでも会えるし」

「すまん、最後の方が聞こえなかったんだけど？」

「……………何でも無いわよ。それにしてもいいのマスター？」

「何がさ？」

「もうそろそろ生徒が教室に入つて来る時間よ」

「そのどこが……………ハッ!？」

確かにレンとの会話でいつの間にか二十分も経っていた。もう生徒がちらほら来てもおかしくない時間だ。だが、問題は別にある。いくら櫛鹿の制服を着てるからといっても見た目は九歳の少女。そんな少女を足の上に座らせている（座られている）実年齢二十二歳の男。．．．．．なんていうか危ないだろ？いろいろと。これじゃあ人間失格の第一歩を踏むどころか人間失格のレッテルを貼られる。それじゃあ一年間精神的に保たない。なんてったって心は硝子で出ているんだから。

「って、そんなことを考えている場合じゃない！頼む、レン！どいてくれ」

耳を澄ませばコツコツと廊下を歩く音が聞こえてくる。しかもこれは一人じゃない。複数人いる。

「．．．．．嫌って言うたら？」

．．．．．クッ。こいつ最高の笑顔で笑ってる。この状況を楽しんでやがる。

「なんでさ！？主人のピンチなんだ。助けてくれ！！」

絶対に変態というレッテルだけは貼られたくない！それだけは勘弁してほしい。

「．．．．．じゃあ頭を撫でてくれたら考えてあげる」

「．．．．．え？」

「嫌なの？」

「嫌じゃないけどさ……………」

こういうのは嫌とかそういうものじゃないと思う。たまにレンの頭を撫でることはあるがそれはあまり意識せずにやってることだからな。……………ようするに恥ずかしいのだ。

「考えてる暇なんてあるの、マスター？」

「……………ク！」

聞こえてくる足音はもうすぐそばまで来ている。レンの言うとおり考える暇俺にはない。

そう判断してレンの頭を撫でる。撫でられているとうの本人はなんともまあ満足そうだ。

「（もういいだろレン？頼むからどいてくれ）」

もはや足音の主はすぐそこにいる。だから、まだ足の上から動かぬこの従者に念話で懇願する。

「（あら、私は考えるって言うただけでどくとは言っていないわ）」

「なにー！！？」

まさかの答えについ叫んでしまった。……………念話とか関係無しで。そしたら当然……………

「どうしたの!？」

「……………何が起きたのか見なくなるのが人の性って言うんだろ
うな。……………何が言いたいかって?つまり、二人は走って教
室に来たわけだよ。」

「……………お、おはよう」

俺は今笑えているだろうか?出来る限り平静を装いながら挨拶する。
だが、残念ながら背中中は冷や汗でびっしょりだ。

「…………………………」

教室に入って来た二人 早乙女と坂崎は俺たちを見るやいな
や見事に目か点になっている。

ああ、さよなら。俺の第二の学校生活。俺もレンみたいに
死んだ振りして暗躍活動に徹しよう。こう見えて結構楽しみにして
たのに……………本当だぞ?

「か……………」

「か?」

「可愛い!-!」

「……………は?」

いきなり早乙女は駆け寄ってきて俺の足の上にいるモノを両手で持ち上げ．．．．ん？

「可愛い子猫だね」

．．．．そう、早乙女が持ち上げたのは人型のレンではなく既に変身して猫型になっているレンだった。

そして、この時ようやく気づいた。俺ははめられたのだと。猫型の時のレンの表情は読みづらいが今ならわかる。

．．．．こいつ、大爆笑してる。マスターであるはずの俺を陥れて喜んでやがる。こいつの目がそう物語っている。

「士郎くん、抱き締めていい？」

「．．あ、ああ。いいぞ」

出来るだけ強くお願いします。そんな小さな願いが通るわけもなくレンは優しく抱き締められる。何にも抵抗しないレンに早乙女はずいぶん嬉しそうだ。

「おはよう、衛宮くん。その猫って衛宮くんの？」

早乙女と違ってゆっくりと歩み寄る坂崎。その右手には包帯が巻かれている。

「ああ。家に置いてきたはずなのについてきてたみたいでさ．．．．」

これは嘘じゃない。事実だ。

「だから驚いてたんだ」

「あ、ああ。そういうことだ・・・」

ちなみにこれは嘘だ。

「それだけ好かれてるってことだね」

「・・・・・・・・・・・・・・は？」

好かれてる？誰が？誰を？

もしかしてレンが？俺を？

そんなバカな！黒レンならともかく、白レンは俺に対して反抗的だぞ。さっきだってそうだ。俺を虐めて楽しんでいたんだ。

それが本当かどうか確かめるためにレンに触れようとするが・・・

「いたッ！」

軽く引っ搔かれてしまった。・・・ク、おそらくだがまだ笑っているな、こいつ。

「・・・・・・・・・・・・・・これでもか？」

そうやって実演して見せると・・・・・・・・

「はは．．．．．」

坂崎は苦笑していた。

「隔」

レンが俺の前に現れたあの日、結局蝕が出現することはなかった。

それでも決して良い状況とは言えなかった。

先生が教室の皆に伝えるまで教室の隅でガタガタと震える者、同じことを何度も言い繰り返す者、他者と言い争う者。そういった生徒がたくさんいた。

皆が恐怖でまいつてしまっている。まるで恐怖が伝染し、一種の病のようになってしまうていたのだ。

この時の俺は本当に無力だった。いくら鍛錬で鍛えようが、実戦をこなそうが生徒たちの恐怖を取り除くことは出来ない。

「また顔に出てるわよ、マスター」

また注意された。今は同じ部屋の子が最初の蝕で亡くなり、一人部屋になったからレンと一緒に住んでいる。

「おおかた、どうやってたら皆の不安を取り除くことが出来るかとかで悩んでたんでしょ？」

「う．．．．．、鋭いな．．．．．」

「当たり前よ。何年マスターの使い魔やってると思ってるのよ？」
それでもマスターの人となりは理解しているつもりよ」

馬鹿じゃないの？と最後に付け足す我が従者。

「おいおい、馬鹿はひどくないか？」

「馬鹿だから馬鹿って言うてるのよ。いい？人には適材適所っていうものがあるの。マスターは戦場で戦うことでしか誰かを救えない」

「……………ッ!？」

……………わかってるさ。俺はそうやって生きてきたのだから。

俺に人の心を癒す力なんてない。

「……………はあ」

そんなことを思っているのがまた顔にでていたのだろう。今度は注意どころかため息をつかれた。

「まあ、現実では私たちに手を出す手段はないわ。でもね、夢の中では話は別よ」

……………!？そうか。レンは夢魔だ。基本的に夢とはレム睡眠という脳の活動の一つで思考や記憶の整理をしていると言われている。なら、これをつまく利用すれば精神的に楽になるかもしれない。

「じゃあ、レンー！」

今日からでもいいからすぐにやってくれと頼もうとするが、レンが先に思わぬことを口にした。

「ご安心を、マスター。もうすでに実行してるから。さすがに全員は出来ないけど何人かをピックアップしてやってるわ」

「．．．．え？」

まさかの発言について間拔けた声を出してしまった。

「だから言っただでしょ？マスターの人となりは理解しているつもり
って」

「．．．たく」

ついレンの頭を撫でてしまう。この前は恥ずかしかったが、今は何より嬉しさで胸がいっぱいだ。全く、俺の従者になるやつはどうしてこう出来るやつばかりなんだろうか？

+ ? + ? +

さて、残念なことに今日は晴れ。雲一つない晴天である。皆が皆その事に落胆している。中には雨が降ってほしいと口に出し切実に願っている者もいた。

しかも、この生徒たちの中でも数人しか知らないことではあるが今の生徒総数は159名。3で割り切れる数字である。

「な、何!？」

「まぶしッ!？」

「見えな．．っ!」

天から降り注ぐ強い光に、空を見上げていた生徒たちは皆目を瞑り、背けた。

その光はまさに一瞬だった。

誰も予期しえなかった出来事に狼狽え、そして

「行つたか・・・」

生き残っている全ての生徒が校内から姿を消した。

+ ? + ? +

隔離型

ある一定の条件に基づいて発動する蝕の一つのパターン。此度の蝕は典型的な隔離型で三人一組になり異次元の世界に飛ばされ出口である扉を目指し、そしてこの世界の主を打倒する。それがもとの世界に戻る唯一無二の条件である。

「う・・・ここは？」

仰向けに倒れている女生徒

坂崎志絵が目を覚まし、上半身

を持ち上げる。辺りを見渡せば木や雑草が青々と生い茂っている。

さっきまで校内にいたはずなのにいつの間にか森の中にいるし、一緒にいたはずの早乙女あやもおらず不安が募る一方だ。カシャ、カシャと不気味な音が鳴り響く空を見上げれば意味深そうな、だがその意義がよくわからない物体が浮いている。よくわからないがとにかくその存在が志絵の不安を大きくする。

「お、目が覚めたか？」

真後ろから聞いたことのある少し低い声。それには不安も焦燥感も感じられない。若干ではあるもののその人物の声を聞いて気が和らいだ。

「．．．衛宮くん、無事だったんだ」

確かに後ろを振り返れば声の主である衛宮士郎がそこに立っていた。だが、士郎は志絵が予想していなかったモノを背負っていた。

「．．．．．それ、誰？」

士郎が背負っていたのは櫛鹿の男子生徒。士郎と同じ櫛鹿の制服を着ているからそれは間違いないが、見たことない人物だから一組以外の人物なのは容易に予想がついた。

だが、問題なのはその怪我だ。男子生徒は頭をグルグルと包帯で巻かれ、左腕は手首から下が無くなっている。

「さあ、誰かは知らないけどあっちで倒れててさ。ほっとけないだろ？」

士郎の言葉は正しく、それに志絵は小さく頷いた。だが、志絵の頭は違うことでいっぱいだった。

『始』の蝕。きつとこの男子生徒も餌食にあったのだろうと志絵は予想づけた。そして思い出してしまった。

あの惨状を。あの化物を。そして．．．あの炎を。

[illegible]

志絵は自分が気づかないうちに体が震えてしまっていた。それも当然といえば当然である。檜鹿についての情報を持っていない志絵でもこれが蝕によるものだとして理解している。蝕は文字を使わなければ倒せない。今年は例外がいるがその存在を知っているのは未だ誰もいない。もちろんその例外が目の前にいることを志絵は知らない。話が脱線してしまったが、一般生徒は蝕を相手にする時は文字を使わなければならない。つまり、坂崎志絵が生き残るためには文字を使わなければならないのだ。

彼女の中では蝕よりもあの炎こそが恐怖の対象である。故に志絵は死なないためにこの恐怖に克服しなければならぬ。しなければならぬのだが……今の彼女に克服する勇氣はない。

「今はさ……」

俯いたまま土郎の後ろを歩いていた志絵は不意に話しかけられたので顔を上げるが、その当の本人は前を見ながら歩いている。

「今はまだその文字を使うのは怖いかもしれない」

ドキッとした。まさか考えていることが口に出ていたのかと勘違いするほどにドンピシャに当ててきたのにはさすがに驚いた。

「でもいつか克服する時がきつと来るから頑張ろう。それまでは俺が坂崎を守るからさ」

そう言つて後ろを振り返り笑顔で左手を出された。それを意味する事は志絵にはわからないことだったが、一瞬その笑顔に見惚けてしまった。そして、志絵はそのまま無意識に右手を差し出していた。

今までの不安が自然と安心に変わった瞬間だった。

「龍」(前書き)

坂崎志絵のキャラクターがわーかーらーない。鬱気味のキャラなんて書いたことないので若干キャラが違うかも……。あと、今さらですが、この小説は土郎を中心に進めます。

「龍」

先導している士郎が一人背負っているためか、普段よりもゆつくりな足取りで歩いている。そのため、その後ろを歩く志絵もそのペースに合わせている。

なぜ後ろなのか。別に隣を歩いても何ら差し支えないはずなのに志絵はそれはしてはいけない気がしていた。その原因は彼女の友人の早乙女あやにある。

このところ、部屋に戻れば士郎の名前が何度か話題に挙がってくる。もちろん、他愛もない話であって、好きとか嫌いとかそういった類の話ではない。

だが、きっと早乙女あやは気づいていない。自分が嬉しそうに話すその姿を。それは恋慕か尊敬か、はたまた全く違う感情かはわからないが、衛宮士郎に対する何らかの想いが芽吹いているのは間違いない。

それを知っている志絵だからこそ、士郎の隣を歩くことが出来ない。もし、歩めばそれは同時に友達を裏切ることになるのだから。

+ ? + ? +

「着いたぞ」

前を歩く衛宮くんの声に顔を上げる。そこには六つ目の龍の彫刻が彫られた扉があった。

「これが・・・出口？」

「ああ、そうだろうな」

誰に尋ねるつもりなんてなかったのについ頭によぎった疑問を口に
してしまった。それに律儀に答える衛宮くんは妙に断定的だった。

「なんでわかるの？」

「これ見てくれ」

指差されたのは扉の端の部分。そこを覗けば私たちがよく知る校舎
が建っている。確かにこれを見ればこの扉が出口だということに頷
ける。でもどうやって開けるのだろうか？扉には錠がついているし、
なにより五メートル近いでかさ。触れば石のような硬さだしきつと
私たちでは開くことは出来ない。

そんなことを思っている矢先に

「（我は『龍』・・・）」

頭の中で誰かの声が響いた。その声の主は衛宮くんでもな
く衛宮くんが背負っている男子生徒でもない。扉に彫られた龍自身
だった。

「な、なに！？」

いきなり聞こえた声に狼狽えてしまつが衛宮くんは驚く様子も見せ
ず竜を見つめている。

私もそれに見習い上を見上げれば、いつの間にか龍の目が開眼されていた。

「（汝らに試練を与える者なり。ここより無事下界へ出たくば我が試練を受けよ）」

「試練だと？」

「（この扉の鍵は我が体内にあり。それを見ん事手中に収めてみせよ。方法は二つ。一つは『技』を用いて我に挑む法……。もう一つは『力』を用いて我に挑む法……。『技』か『力』か……。汝らが選択し、我を打破せよ）」

「……………もしかしてこの錠の鍵を竜の体から取り除かないといけないの？」

「おそらくそうだろうな。『技』が文字を使って龍の体内から鍵を取り出す。そして『力』が竜と戦って鍵を奪うつてところだろう」

“戦う”……その単語を聞いただけで震えが止まらない。もう一度あの炎と立ち向かうなんて絶対に嫌だ。

「……………さき」

文字は私にとってマイナスにしかない。文字は蝕を寄せ付ける餌だし、肝心の能力もこの体を蝕む恐怖でしかない。

「坂崎！」

いつの間にか思考の渦にとらわれていたのか、気がつけば隣で衛宮

くんが私の名前を叫んでいた。

「．．．な、なに。衛宮くん？」

「いや、具合が悪そうだったから大丈夫かなと思ったんだけど？」

本当に心配しているのだろう、私の顔色を伺う彼の目に濁りはない。

「うんうん、大丈夫だから。心配しないで．．．．。だけど鍵どうしよっか？」

これ以上心配させないためにも話題を変える。といっても私たちにとつてこちらが本題なのだが．．．．衛宮くんから意外な一言が発せられた。

「ああ、それなら大丈夫だよ」

「．．．．．．．．．．？」

何が何を思つて大丈夫だと言つのだろうか彼は？そうやって彼を見ていると、私が呆けているのに気づいたみたいで手に持つモノを見せてくれた。

「それつてもしかして．．．．．」

衛宮くんの持つモノに目が奪われた。なぜならそれは

「坂崎の予想通りこれはこの錠の鍵だよ」

思つた通りそれは扉に取り付けられている錠の鍵らしい。

「でも、どうやって?」

「これが俺の能力なんだ。鍵みたいな構成が単純なモノなら大概作れるぞ」

すごい。．．そして羨ましいと。純粹にそう思えた。皆が戦うための文字を書いていたと思っていたのに衛宮くんは違った。

戦うっていうことは自分にしろ敵にしろ何かしらを破壊するというのに、衛宮くんはその対極。どういう文字を書いたかは知らないけど、それは衛宮くんの手によって生み出された。

．．．それが本当に羨ましい。破壊ではなく創造するその能力が。

「坂崎、少し離れていてくれないか?」

「え?何で?」

何故か衛宮くんは背に背負っている男子生徒を扉から十メートルほど離れたところにゆっくりと寝かせる。

「開けた瞬間にこの龍が暴れたりしたら嫌だろ?」

「それは．．．．．」

考えすぎじゃないかなと思ったけど、ありえないとも言切れないからつい言い淀んでしまった。

「でもそれじゃ衛宮くんが危ないんじゃない?」

「大丈夫。こう見えて俺鍛えてるしさ」

そう言っつて少し恥ずかしげに力こぶを作るポーズをとる。それが可笑しくてつい微笑んでしまう。

「お?ようやく笑ったな」

「.....?」

「坂崎は可愛いんだから、もっと笑った方がいいぞ。そしたらもっと可愛く見えるしさ」

「な!?!」

開いた口が閉まらないとはまさにこのことだろうと身をもって知る事になってしまった。頬が赤くなるのが自分でもわかる。唯一の救いが衛宮くんが扉の方に歩いて、こちらを見ていない事だ。

「.....ふう」

.....まだ胸の高鳴りがおさまらない。可愛いなんて言われたのは生まれて初めてだから仕方ないと言えば仕方ないな。

だが、現実とは常に非常である。そんな常識を私は忘れていた。

「動くな!!」

次の瞬間、何が起きたのかわからなかった。

+ ? + ? +

それは油断から招いた結果。すでに男子生徒が起きていることには気づいていたが、こうなるとは微塵も思っていなかった。勝手に敵は蝕だけだと決めつけてしまっていた。

「おい、冷静になれ！」

男子生徒は坂崎の首を左腕で締めて、己の文字であろう『銃』を具現化し、坂崎の頭に押し付けている。

「うるせえ！お前、文字を使おうだなんて思うなよ。使った瞬間にこいつの頭は弾け飛ぶぞ」

更に強く銃を坂崎の頭に押し付ける。その押し付けられている坂崎の表情は段々と蒼白になっていく。

「・・・・・・・・何が望みだ？」

これ以上この生徒を刺激してはいけないと判断し、相手の要求を尋ねてみる。

「鍵を渡せ！！」

「何・・・・・・・・・・？」

一瞬その理由の意味がわからなかった。鍵を手にしたところで、結

局は皆がここから出れば問題ないと言うのに。

「とぼけんな！龍も言っただろ！！ここから出れるのは鍵を持っている者だけだって！！」

「なんだと？」

そんなことは聞いていない。坂崎にもその様な声が聞こえている様子はなかった。と言うことはこの男子生徒だけが聞いたことになる。つまり、これは錯乱するための罠か！？

「落착着け！それは龍の罠だ！」

「嘘つけ！お前も知ってたから一人で開けようとしたんだろ！！」

「ッ！？」

揚げ足をとる形で反論されてしまった。．．．．．最悪の場合を考えて二人を巻き込まないための行動が裏目に出てしまった。

「いいからさっさと鍵をそこに置け！！」

「．．．．．」

ここは相手の言うとおり、手にある鍵をその場に置く。そして、俺たちはジリジリと互いの立ち位置を円を描くようにして交換する。

「おい、お前。鍵をとれ」

「．．．．．わ、私？」

「そうだ」

男子生徒は坂崎を一旦解放するが、銃口は未だに坂崎の頭を狙っている。

坂崎は体を震わしながら膝について鍵をとりそれを渡す。

それを手にとると男子生徒はニヤリと笑い、坂崎を蹴り飛ばした。

「キャアッ!？」

「・・・・・・・・クッ!」

飛ばされた坂崎と地面の間に急ぎ、受け止める。

「・・・・・・・・ゴホッゴホッ!」

腹を思いきり蹴られたせいか、坂崎は胃の奥に溜まっていたモノを吐き出している。

「大丈夫か・・・・・・・・?」

そう言つて背中をさするうとしたら・・・・・・・・

「触らないで!!」

左手で弾かれて拒絶された。その出来事に一瞬呆然とし、気づけば坂崎から睨まれていた。

「……………あなたもツ、私を利用しようとしたんでしょ!？」

「……………なツ!?ちがッ」

違う、と。否定しようとした瞬間高まる魔力を感じその場から坂崎を思いきり押し飛ばし回避した。

「いたッ!？」

運良くその攻撃は坂崎には当たらずにすみ、怪我という怪我は負っていない。

「何するの……………衛宮くんそれ!？」

坂崎がこちらを見ると、先程とは違って驚愕を込めた眼差しで見つめてきた。それも当然だ。さっきまであった左腕の肘から下が無くなっているんだから。不幸中の幸いともいうのだろうか、今の攻撃が高熱過ぎて血が沸騰し外に流れるのを防いでくれる。その分痛みも伴うがこの程度なら問題ない。すぐさま魔術回路をオンにし、投影しようとする。

「すまない、坂崎」

「……………え？」

「守るって言ったくせに何度も危ない目に合わせてしまっ……………でも、これだけは信じてほしい」

「……………投影、開始」トレス・オンと心の中で紡いで数多の剣の中から竜殺しの剣を投影する。

「俺は決して君を裏切ったりしないから」

そうして竜殺しの剣を持って黒き竜と対峙する。

+ ? + ? +

やった、やった、やった!!

あの白髪の男から鍵を奪うことに成功した。さつさとこんな世界とはおさらばして元の世界に帰ろう。

笑みがこぼれるのを気にせず錠に手をやろうとするとあることに気がついた。

「な、なんだコレ!?!」

さつきまで白かった竜がいつの間にか腐った様に黒くなっていた。しかも、その匂いもはつきり言って腐ったモノから発せられる悪臭だ。

「(汝に問う。何故鍵を奪った?)」

「なッ!?!お前が鍵を持っている奴しか出られないって言ったからだろ!?!」

「(.....)」

「いいから早く出せ!?!」

「（ならん！人道を踏み外す愚かな人間はここで果てよ！！」

龍の口が大きく開かれ、そこにまるでマグマのような赤い炎が溜ま
っていく。

直感した。これは俺を死の世界へと誘う炎なのだと。

+ ? + ? +

「すまない、坂崎」

「……………え？」

何を言ってるのか私には理解出来なかった。謝られることなんて一
つも無い。むしろ、身を挺して庇ってくれた衛宮くん礼を言わな
ければならないのに。

「守るって言ったくせに何度も危ない目に合わせてしまっ……
…」

うんうん、違うよ衛宮くん。確かに危ない目に合ったけど全部衛宮
くんが助けてくれた。

「でも、これだけは信じてほしい。俺は決して君を裏切っ
たりしないから」

知っている。そんなこと私は知ってるから。

だから

「死なないで!!」

+ ? + ? +

ハアハア!!

グラウンド中探したのに二人は見つからない。全部の扉を見たけどほぼ全てが黒く変化している。先程見つけた士郎くんのペットのレオンちゃんも腕の中できよろきよろと主人である士郎くんを探しているようだ。

「あーちゃん!!」

「あ、アヤちゃん。無事だったの？」

もしかしたらもうすでに出ているかも知れないから、花壇のそばにいた比良坂アイラちゃんに話を聞いてみることにした。

「しーちゃん見なかった!？」

「しーちゃんってまさかシエちゃんのこと? まだ出て来てないの!？」

「うん、それに士郎くんも!!」

「え、士郎くんって……?」

士郎くんの名を聞いてもパツと浮かばないのか、先程開かずの扉から出てきた小さな男の子に目配せする。今は一分一秒が惜しいから知らないなら知らないと早く言っしてほしい。

「士郎って衛宮士郎のことか？」

「．．．え？うん、知ってるの？」

予想外に抹茶色の髪を赤い紐で結ぶ男子生徒
名前が確か日向くん
が話に入ってきた。

「いや、見てない。それに俺たちは四番目に出たけどまだ衛宮はいなかったはずだ」

日向くんが皆に士郎くんの特徴を伝えるが、やっぱり皆知らないと言っ。

「．．．．．あ、レンちゃん！？」

いきなり腕の中にいたレンちゃんが腕の中から飛び出して一つの黒くなった扉に向かう。そして、私たちもその後ろを追い掛ける。

先に到着していたレンちゃんは扉の前で座り、扉を見上げていた。

「まさか、ここに士郎くんが．．．？」

言葉が通じたかのようにレンちゃんは振り向き「ニャー」と鳴いた。

瞬間、扉からギイと音がし、人一人通れるようになりすかさずレンちゃんは飛び込んだ。

そして、そこから出て来たのは気絶しているしーちゃんを背負った士郎くんの姿だった。

「あれ、どうしたんだ。皆おそろいで？」

私たちの姿を見て、未だ事態の異常性に気がついていない土郎くん
につい呆れてしまうが私は一言彼に言わなければならぬことがある。

「おかえり、土郎くん」

それを聞いた土郎くんは一瞬キョトンとしたが、すぐに笑みを浮か
べてこう言い返してくれた。

「ただいま」

P・S・ 土郎くんの腕が無くなっているのには驚いたが、その
直後に死んだ人が生き返ったのには心底驚いた。

生徒総数	159名
死亡者数	26名

生存者数	生還者数
------	------

1 3 4 名	1 名
------------------	--------

「情」(前書き)

今日は数字をとりにいきます。by春ノ風

「情」

「いただきます」

無事「龍」の蝕から生き残り、それから三日過ぎた夕方。今では定着した六道と比良坂の三人で飯を食べている。．．ん？美味しいなこの煮付け。また、衛宮が作ったのか？

「．．．．．？」

「どうしたの、六道くん？」

「何だか皆から見られている気がするんだけど．．」

「そりゃ気のせいじゃねえよ」

こいつ鈍過ぎだろ。脱出不可能と言われたあの開かずの扉を開けた二人の内の一人だ。それがどれだけ異常なのかわかっていない。

不可能を可能に変えたその奇跡。周りが注目するのも当然というものだ。

しかも、六道の場合その奇跡を起こしたのは六道ではなく全くの別人。あの後、六道が何度か変身しようとチャレンジしていたが出来なかったからそれは間違いない。

だが、問題は六道ではなく開かずの扉を開けたもう一人の人物

「こんにちは、みんな」

お茶を手にとり、飲もうとしたらふと後ろから声がした。

「あ、衛宮く．．．!？」

「こんにつ．．．!？」

その挨拶に返事を返そうとした二人が俺の後ろを見て目が点になった。何に驚いたのか気になり後ろを振り向くと

「ぶッ!？」

「うわッ!？汚ッ!！」

すぐ後ろにいた衛宮を見てつい飲みかけのお茶を吹いてしまった。そして、そのお茶は衛宮にかかってしまった。

でも仕方ないだろ？制服姿の衛宮を想像してたのに、その衛宮はエプロン姿だったんだぞ!？．．．ピンクの。もう、別の意味で注目されてるよこいつ!!

「わ、わりい．．．」

．．．．．しかも、何か似合ってるし。何でだ？

「いや、エプロンだから洗えばいいよ。隣いいか？」

「あ、ああ」

俺のお茶から回避させたトレイをテーブルに置き、その場でエプロンを脱いでから隣に着席した。数瞬後に衛宮のペットのレンとかいう猫が衛宮の膝に乗ってきた。

「すごい懷かれてるんだな？」

猫つてもつと単独行動が好きな生き物だと思つてただけだな．．．

「ん？ああ。レンのことが。まあ、レンとはもう四年の付き合いになるしな」

「そついうもんなのか？」

「そついうもんだろ？」

．．．．．なんでだろ。こいつも六道と同じで鈍いキャラな気がする。

「．．．腕大丈夫なのか？」

「ああ、生活するにはさして支障は出てないよ。ただどうしても料理とかノートを書き写す時とかは時間がかかるけどな」

衛宮の左腕は以前の蝕の時に肘から下が『龍』の攻撃で無くなったらしくて、それからは自分の持つて来た赤い包帯で巻いている。何故赤なの聞いてみたら本人曰く「赤の方が白よりかっこいいだろ？」なんて検討はすれな答えを返しやがった。

「．．．．．そつ言えば早乙女とかはどうしたんだ？最近一緒に

るの見かけないけど」

「いや、それがさ……。何だか坂崎から避けられてるみたいでさ。二人は自分の部屋でご飯食べてるよ」

はは、と寂しそうに笑って答える衛宮。

「え？シエちゃんが？何で？」

エプロン姿の衛宮を見てフリーズしていた比良坂が復活して話に介入して来た。

「おそらく『龍』の蝕の時だな。というか、そこしか心当たりがない」

「何かあったのか？」

この時はラッキーだった。図らずして『龍』の蝕の話に持っていかれたのだから。

でも、あんまり俺は運が長続きしない方みたいだ。

「こんにちはっ！！！」

本題に入ろうとしたら隣から見知らぬ生徒が三人現れた。

「はじめまして。六道くんは衛宮くんだよな？」

「あ……。うん、うん」

「・・・ああ」

二者二様といった感じで二人は適当に質問に答える。

「ぼくルディ！よろしく。君たちみたいに強そうな人たちがいてくれると心強いよ！！」

そして、ルディとかいうインド人らしき生徒は衛宮と六道に握手を求めた。・・・俺を抜かして。

「あたしねっ。あたし青島ぱっち！話聞かせてほしいなーって」

次は・・・こいつよく見たら見たことある気がする。というか、こんなうさぎみたいな帽子被ってる奴はこの櫛鹿には他にいないだろ。

「あっ、オレ。朝長ね」

最後は長身で額に文字が入ってる男。顔も整っていてモデルにもいそうな感じだが、二人に比べそれ以上の個性はなさそうだ。

・・・ん？

「おい、衛宮。レンが警戒して・・・！！？」

レンがわずかに尻尾を立てて三人の方に顔を向けていたので、それを伝えようと顔を上げれば先程の衛宮の眼とは大分変わっていた。それを一言で言えば恐怖。蝕なんかとは違う。本能が告げる。こいつと絶対に敵対したら駄目だ。目を見たその瞬間にそう悟ってしまった。

「ん？レンがどうしたって？」

返事を返す次の瞬間にはいつもの衛宮に変わっていた。視線だけ下ろせばレンもすやすやと寝ている。．．．．．もしかしたら俺の思い過ごしかも知れない。

「．．．．．いや、何でもない」

それでも油断はできない。こいつの人柄ですっかり忘れていたが、こいつは六道みたいな別人が開かずの扉を開けたんじゃない。なくてこいつ自身の手で扉を開けた。

なら、たとえ片腕が無いにしてもこいつは六道以上の戦力にはなるがそれと同時に要注意人物にもなる。

+ ? + ? +

「しーちゃん、ただいまー」

あやが部屋を開けると靴はあるが電気はついておらず、返事も返って来ない。だが、だからといって寝ているわけでもない。

ここ最近志絵はいつもこうだ。授業が終われば他の友達と話すことなく一目散に帰り、帰ったら何をするでもなくただぼつと椅子に座るだけだ。

「ごはん持ってきたよー。今日のメニューはサラダにパスタに餃子。ドリンクはメロン茶。デザートは大好物のドーナツ！ー」

．．．．．なんていうか凄まじいメニューである。メロン茶？何

それ美味しいの？とは思うがあや的には絶品らしい。

「ささ、食べよ食べよ。いっただきまーす」

志絵を席に促し自身も机の前に座る。ちなみにあやが最初に手を出したのはドーナツ。デザートのはずのドーナツである。まあ、それもどうでもいいことである。

？「ねえ、しーちゃん。明日こそは一度士郎くんと話してみない？」

「！？」

士郎の名を聞いただけで志絵は持っていたドーナツを落とし、ガタガタと震えだす。

「士郎くんもきつと許してくれるよ」

「ダメだよ！だって私、衛宮くんの腕を奪ったんだよ！？」

「それでもきつと士郎くんは許してくれる。私はそう信じてる」

まだ会って日も浅いというのにあやは士郎に対して絶対的信頼をおいている。いや、あやだけじゃない。志絵だって心の中では許してくれると信じている。だが、もしも

「それでも嫌われたくない……………」

万が一……という可能性を考えてしまえばそれは志絵にとって最も辛い経験となるのは間違いない。生まれて初めて『恋』というものをしたのに、相手は皮肉にも自分を命がけで守り、彼の

腕を失った。誰でもない、志絵のせいだ。

．．．．．もし会えば、今まで通りに接してもらえないかもしれない。

なら、会って何かを変えるよりも、今の状態を保ち思い出だけに縋ればいい。それは今までの人生の中ではちつぽけで、だけど志絵にとってそれは本当に大きなモノ。だから、その思い出を大切にするために志絵は前に進まないことを決意した。

「しーちゃん．．．．．」

それはきつと間違いだとあやは思う。思い出もいずれは風化し、塵のように消えてしまう。立ち止まるという選択肢はベストでも、ましてやベターでもない。だが、前に進めば理想が現実のモノになるかも知れない。だからこそ、あやは志絵に前に進んでほしいと切に願う。

しかし、もしもあやが志絵と同じ立場ならどうするだろう？

前に進む道を選ぶだろうか？それとも志絵と同じように立ち止まることを選ぶだろうか？

．．．．．おそらく、早乙女あやも坂崎志絵と同じ道を行くだろう。同じ人を同じように想うあやなら、きっと彼女も立ち止まってしまう。

．．．．．だから、あやは志絵に対して何も言うことが出来なかった。

+ ? + ? +

なにも変わることなく時間だけが過ぎ、朝になる。

女子寮の一階にある一つの部屋の玄関では二人の少女がいた。一人は制服に着替えているが、もう一人は部屋着のままで見送ろうとしている。

「ホントに休むの？学校・・・」

「うん・・・・・・・・・・」

元氣のない返事。あやがの友人の志絵は日毎に元氣が、いや、今では精氣がなくなっていくように感じる。このままではいけないと頭ではわかっていても、実際打開策が浮かばない。

「・・・・・・・・・・わかった。じゃあ行ってくる。ゆっくり休んでね？」

そう言っただけで何も出来ない己の無力さを心の奥底にしまい、なんとか笑顔を作って「行ってきます」と挨拶した。

志絵はあやが出たのを確認し、ベッドに戻ろうかとしたところ、足音がこちらに向かってきているのが聞こえた。

パンツと大きな音を立てながらあやが血相をかかえて再び部屋に戻ってきた。

「しーちゃん！今っ・・・・・・・・さっきそこで今日蝕があるって！！だから」

幸か不幸か、坂崎志絵の第一歩を促したのは早乙女あやでも衛宮士郎でもなく蝕の出現だった。

「情」（後書き）

二巻の終盤までできてしまった。このペースで行けば六月までに六巻まで行っっちゃう気がする。そしたらネタが．．．ま、いつかなうようになるだろう

「外伝」(前書き)

この外伝は本編とは関係ありません。また、文章表現も本編と比べていい加減になっているかもしれませんが、その辺りご了承ください。

「外伝」

『係』・・・衛宮、六道、日向、アイラ

「―――食堂での出来事

「あ、衛宮くん」

「おはよう。六道、日向、比良坂」

「おはよう。ねえ、聞いてよ衛宮くん」

「どうした？」

「日向くんの係って黒板消し係なんだよ」

「るセッ！お前も生き物係だろうが！！」

「はは・・・」

「そう言えば衛宮くんは何の係なの？」

「俺？俺は食事係だ」

「食事係？それってなにやるの？」

「どうせ料理の配膳とかだろ？楽でいいよな」

「いや違つぞ」

「ん？じゃあ何をするんだ？」

「料理を作る係だ」

「「「は？」」」

「いや、だから料理を作るんだよ。六道が食ってる酢の物も日向が食べてる海鮮サラダも比良坂が食べてる明太子パスタも今朝俺が作ったものだ」

「「「え〜！！？」」」

「――その日、二人の男子生徒は今の係でよかったと安堵し、一人の女子生徒は女としてのプライドが崩れた……らしい。」

『部』・・・衛宮、六道、アイラ、ノア

「――廊下での出来事

「ノアちゃんって何部だったの？」

「私？私は洋弓部だったわ。アイラちゃんは？」

「私は部活はしてなかったの。その代わり毎日道場でおじいちゃん

と刀の稽古してたんだよ」

「二人ともすごいな。衛宮くんはなにしてたの？」

「俺は一年だけ弓道部に所属してたな。こう見えて期待の新人だつて言われてたんだぞ」

「へえ、衛宮くんすごかったんだ。ノアちゃんと勝負したらどっちが勝つかな？」

「それは私も興味あるな」

「なら今度勝負してみたら？」

「いや、俺も勝負してみたいけど、腕がこんなんだしな」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・ごめんなさい」「」」

「・・・・・・・・・・？」

何が起こったのかわかっていない士郎に何も説明出来ない三人であった。

「外伝」(後書き)

外伝は徐々に書き足していくつもりです。

「水」(前書き)

．．．．．何か最初考えていたルートから段々おかしくなってる
気がする

「水」

グラウンドに出れば生徒のほとんど全てが空を見上げている。それにつられて俺たちも見上げれば空には馬鹿げたでかさの波紋が出来ている。

？「何あれ！？」

見上げている生徒を代表して六道が誰に問うでもなく皆の疑問を口に出す。

文字を使ってもアレのデータは取れない。つまり、今回初めて出る文字ということか……ん？

何か視線を感じるので後ろを見ればバカ二人が俺を見ている。大方、あの文字についての知識だとか戦い方を教えてほしいんだろ。

「……………」

「……………知らん」

「ええ！？まだ何も言っていないのに！！」

「うるせえ！どうせあの文字について聞きたいんだろ！？あいつは初めて出る文字だからデータがねえんだよ！！」

知らんもんは知らん。そんな俺にはどうしようもない！

「なるほど、日向は一度出たことがある文字でないと役立たずとい

うことが」

「ぷつ、それ言っちゃダメだよ衛宮。ただでさえミソ活躍してないんだからさ」

「．．．．．何か聞き捨てならない会話が別のところから聞こえるが今はそれどころじゃない。」

「来るぞ！」

空の波紋から飛び出してきた鎖に繋がったハサミのような形をした蝕。それは十、二十なんて数じゃない。軽くその倍はある。それら全てが生徒目掛けて落ちてくる。その様はまるで小さな流れ星のようだ。それに対し生徒たちはそれぞれ自分の文字で対抗する。

「．．．．．その時俺は違和感を感じた。」

比良坂やノアはそれぞれの武器で飛来する蝕を弾いているというのに、衛宮は違った。

迫り来る蝕を斬り伏せている。衛宮の周りには一刀両断された蝕が次々と積み重なっていく。

「おい、ミソ！上！！」

ミノが叫び、上を見る。気づけばそこにはすでに俺目掛けて落ちてきている。これは　避けれない！？

もはや一メートルにも満たない距離に達していたが、武器を持たない俺には撃墜手段などありはしない。だが

「 なっ!?! 」

俺に当たると思われた蝕も横から飛んできた何かに両断される。そして、通り過ぎた何かをよく見ればさっきまで衛宮が使っていた剣だった。

「大丈夫か日向? 」

「悪い、衛宮」

衛宮が蝕の合間を避けて近寄ってきた。

「これ持つとけ」

そう言つて手渡されたのはさっき飛んでいった剣の色違いの黒い剣。なかなか重量感があり、素人目から見てもいい剣なのがわかる。

「でもいいのか? 」

「ああ。俺はもともと双剣使いだけど、手がこんなだからな。ちよつと重いかも知れないけどないよりはマシだろ? 」

「いや、そう言うことじゃなくて……」

今衛宮はもう片方の白い剣は俺を守るために飛ばしてしまった。だから、衛宮の手には武器は一つもないことになる。

「大丈夫だよ、ほら」

衛宮が先ほど飛ばした剣を指差す。その指の先に視線を変えると、剣が急旋回し、こちらに戻ってきている。しかも、途中何匹かの蝕を切り裂いているというのに全くスピードが衰えない。

「……………よっ、と」

そして、俺目の前で衛宮は苦もなくそれをキャッチする。

それを目の当たりにした俺は戦場であるにも関わらず、信じられないものを見たかのように呆然としてしまった。

「どうなっただそれ？」

率直な疑問に、衛宮は蝕を撃墜しながら考える素振りを見せて答えた。

「……文字は要するに経験とイメージなんだろう？ 今のはブーメランなんかをイメージしただけだ」

……………確かに衛宮の言っていることは理にかなっている。だが、本当にそうなのか？ キャッチの時だってあんなにきっちりと柄を握めるものなのか？

だけど、こいつが嘘を言っているようには見えない。

「士郎くん!!」

後方から衛宮を呼ぶ声が聞こえたので、衛宮と同時に振り向くとそこには笛を持った早乙女がいた。

「しーちゃんが!」

相当焦っているのか、内容も伝えずその一言だけを叫ぶ。

だが、衛宮にはそれだけで十分だったのか、それを聞くやいなやその場を爆ぜた。これは決して比喩なんかじゃない。文字通りの意味だ。衛宮が立っていた位置からは砂ぼこりが舞い、肝心の衛宮は十メートルほど離れていた早乙女を追い越して、校内に向かって走っている。

「早乙女は皆と一緒にいる!」

後ろを振り向いてそれだけを伝えようと、衛宮はさらにスピードを上げ、遂には見えなくなってしまった。

「……………一体何者なんだ、あいつ?」

結局衛宮が何者なのかなんて俺にはわからないことだった。

+ ? + ? +

雨のように落ちてくる蝕を必死に避けて走り抜ける。

辺りはパニックに陥っており、生徒が間違えて生徒を攻撃していたりする。

「……………ハアハア!」

通路を走り抜けて路地を横に曲がる。

「きゃああっ!!」

通路の先にはすでにこの蝕の犠牲となった生徒が倒れている。

そして、ガチッガチッと音を出して生徒を食べていた蝕が目私を捉える。

どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう!!

文字は 使えない。

助けは いない。

生き残る手段なんて私にはもう ない。

「.....なら、もういいかな」

もうどうせ櫓鹿にいてもいつかは死ぬ。なら、少しでも彼との思い出が鮮明なうちに死ねばいい。そうすれば彼との思い出は永遠のモノとなる。

蝕が私の首目掛けて飛来する。.....大丈夫、痛いのは一瞬だから。首が千切れて足元に落ちてぴゅーと血が吹いて、それから.....いや、もう何も考えなくていいや。目を閉じれば全て終わってるんだから。ようやく開放されるんだ!

「・・・・・・・・さよなら」

この世に未練なんかない。だから、この言葉は誰かに対して言った言葉ではなく、こんな馬鹿げた世界に言ったのだ。間違っても一人なんかのためじゃない。

・・・・・・・・・・・・・・・・ほら、時間
が経っているのに、痛みなんか微塵もない。きっと私は一撃で殺されたんだ。そう思ったのに、ふいに光が浴びせられた気がした。そして、目を開ければ

「さよならなんて言うなよ。坂崎が死んだら俺や早乙女が悲しむだろ？」

私の騎士（ナイト）がそこにいた。

「・・・・・・・・う、うわああああん!!」

彼を見た瞬間、私の心は決壊し、それは涙となって流れ落ちた。未練がないなんて嘘だった。私はこんなにも彼を求めているのに・・・・。こんな思い出だけなんかじゃいやだ。私はもっともつと彼との思い出を作っていきたいのだから！

私は恥も外聞も関係なく彼に抱きついた。その時の彼の表情は見えなかったが、子どもをあやすように優しく頭を撫でてくれた。

その温もりが、私の新たな思い出のページとなった。

生存者数	死亡者数	生徒総数
129名	5名	134名

「水」(後書き)

鞘炎になりそうだ．．．でも、一番好きなのは鞘剣です。

ああ、F a t e xなのは書きてゝ

「再」（前書き）

・ ・ ・ 上手く書けない。こっぴつ何て言っただっけ？

「再」

「ヤバイ！！ヤバイって！！」

まだ朝早い時間に部屋の外の通路ではけたたましく騒ぐ声が聞こえる。一体何かと身を起こし、カーテンを開けると既に制服に着替えた日向くんが窓から空を見上げる姿があつた。

「早く支度しろ、六道」

「どうしたの、日向くん？」

「．．．．．蝕が来た」

「え！？蝕って．．．。何で？」

ベッドに掛けられている梯子を降りてそのまま急いでパジャマから制服に着替える。

「．．．．．ッチ！！」

日向くんはぼくの質問に答えず不機嫌そうに頭を掻いて衛宮くんから借りたままの白い剣を手にとって部屋を出ていった。ただ、日向くんの様子と外の騒動からこれが只事じゃないことくらいはわかった。

+ ? + ? +

日向くんを追い掛けて外を出れば、既に広場にはアイラちゃんたち

がいた。

「あれ？衛宮くんは？」

「シエちゃんたちのところに行くから、先にグラウンドに行つてくれって」

この場に衛宮くんがいないのを不思議に思い、質問してみると、アイラちゃんが答えてくれた。

「・・・じゃあ、行くぞ」

日向くんがそれだけを言つてグラウンドに向かう。勘違いかもしれないが、今の日向くんの表情は不安一色といった感じだ。蝕が来たとは言つてたけど、本当に蝕なのだろうか？今までこんな早朝に蝕が現れたことなんて一度もなかったのに・・・。

そして、グラウンドに着き、空を見上げれば自分の目を疑つた。

「ウソ・・・」

だが、どうやら今見ている光景が信じられないのはぼくだけじゃなかった。みんながみんな目を見開いている。

「ああクソ！ここ来てからやなよかばつか当たるよ！！」

空には昨日よりも巨大な波紋。もはや見間違えようがない。今日の

蝕は何なのかここにいる全ての生徒が悟った。

「また来るぞ！！昨日の敵・・・『水』が！！」

日向くんが叫ぶ。それがまるで合図かのように再び『水』の蝕はぼくたち目掛けて降り注いだ。

+ ? + ? +

「士郎くん、どこ向かってるの！？」

あやが士郎の後ろに続きながら問う。初め、あやは一組のみんながいるグラウンドに行くのだと思っていたが、士郎はその逆の校内に走っていった。

「今出ている蝕は昨日と同じ蝕だ。ならグラウンドで迎え撃つよりも校内で迎え撃つ方が効率的だ」

多方向から数で攻められたら、さすがに士郎といえど二人を守りきれるか微妙である。そもそも、片腕の時点で弓は使えず、双剣も使えない。それだけで士郎の戦力は半減している。

それに、既に士郎はこの校内を解析済みなので後は目的地に行くだけである。

「何で昨日の蝕が！？」

「わからない。だけど、一つ言えるのは前回の蝕と違って今回は少々特殊なようだ」

士郎の持つ櫓鹿についての知識はあまりなく、今はほとんどの生徒と変わりはない。故に、何故二日続けて同じ蝕が出現するのかは依然とわからないままである。

そして、三人はそのまま路地を曲がる。だが、そこは二十メートル程で行き止まりになっていた。

「士郎くん、行き止まりだよ!？」

あやが肩で息をしながら聞くが、士郎は行き止まりの一手手前で振り返り途中出くわし追って来た蝕を斬り伏せた。

「ここでもいい。ここなら早乙女でも迎え撃つことは出来る」

士郎の考えは正しい。『水』の蝕は確かに数は膨大だが、それ単体の威力低く壁を貫通することも出来ず、また、『始』の蝕のように壁を通り抜ける特殊能力も備わっていない。

ならば、今いる場所のように三方向を壁で囲まれ、かつ、天井もある場所ならばあや一人でも十分に対応出来る。

「俺はみんなのところに引っついてくる」

「ダメだよ!」

士郎の提案に間髪容れずあやは拒否する。だが、士郎はあやの意見を聞かず再び来た道に戻ろうとするのであやは急いで士郎の服を掴む。

「ダメだよ。だって危ないんだよ?」

「・・・ありがとう。心配してくれて」

士郎は振り返りそのままあやの頭をゆっくりと撫でた。それは時間にして十秒程で終わったが、生まれて初めて父親以外の異性に頭を撫でられたあやは顔を真っ赤にした。

「それでも俺は行かないといけない」

おそらく今士郎たちがいる場所は蝕の被害が最も少ない場所だ。だが、グラウンドには多くの蝕があり、言わば最前線に位置する。故に士郎が衛宮士郎であると言つのなら、ここにいてはならない。一人でも多くの生徒を救うためには一匹でも多くの蝕を討たなければならぬのだから。

「士郎くん・・・」

あやは未だに頬を赤く染めながら士郎の目を見つめる。その眼差しはもはや何を言っても揺るぎはしないだろうと悟った。

「なら・・・、なら私も行く!」

言っても止まらないなら一緒に行く。それがあやが考え抜いた最後の手段。ここを出れば死ぬかもしれないが、一分一秒でも長く一緒にいたいから。だから、ともに行くことを選んだ。

「それはダメだ!」

だが、無情にも士郎の答えはN oだった。そして、士郎は続ける。

「早乙女には坂崎を守ってほしいんだ」

士郎が視線を移す。その先には壁にもたれて座っている志絵がいた。その瞳はあまりの疲労により周りが見えていない。そもそも、ここまでついて来れたのもあやがずっと手を離さず握り締めていたからである。

志絵の疲労はまさに絶頂とも言えよう。いくら昨日士郎と和解したと言ってもそれまでの不安、自分の文字に対する疑心が一気に取り除けたわけではない。それでも、人が生き死にする環境では精神が徐々に麻痺しているというのだ。それに加え、志絵は昨日二時間もの間たった一人で蝕から逃げていた。

故に、今の志絵は精神・肉体ともに疲労困憊しきっており、一人にすればたちまち蝕の餌食になるのはあやの目から見ても明らかだ。

「……うん、わかった。だけど無茶はしないでね」

「ああ、わかってる」

もう士郎を止めることも出来ず、かと言ってこの場を離れることが出来ないあやにはもう一つの道しかなかった。

ここに留まり志絵を守ること。

それが残された道。士郎の手助けをすることは許されない。だから、走り去っていく後ろ姿を見ながらあやはただ士郎の無事を神に祈るだけだった。

そうして、二日目の『水』による神蝕は幕を閉じた。

生存者数	死亡者数	生徒総数
119名	10名	129名

「殻」(前書き)

．．．．．サブタイトル思いつかなかった。ということで今回のサブタイトルを読者様に考えてもらおうかな．．．なんて安易な考えです。もし考えてくれるという方がいたらぜひ教えてください。また、投稿から一週間何もなかったら自力で考えます．．．．．泣きながら。

「殻」

ようやく二日目の『水』を乗り切ることに成功した。とは言っても二日連続の蝕の出現によって生徒たちは疲労しきって、今日死んだ生徒のことなど眼中に入っていない。完全に人の生死に対する神経が麻痺してしまっている。

「大丈夫？」

「．．．．．うん」

比良坂の返事がワテンポ遅い。それに目が虚ろだ。．．マズイな。打開できないままこの調子で神蝕が続いたら先に精神が参ってしまう。

？「ねえ、日向くん。何で『水』はまた出てきたの？」

「文字には特殊な文字があつて、例えば『神』とか『皇』『国』。んで、四大元素の『風』『土』『火』そして今回の『水』だ。これらの文字は弱点を突かないと際限なく現れる」

「弱点って？」

「四大元素なら逆の要素ぶつけりゃいい。今回は『水』だからその逆は『火』だ。まあ、『燃』や『焼』。『炎』でもいいけどな」

俺とミノの文字は戦闘には向いてないし、ノアと比良坂の文字でも不可。袴田に至っては蘇生中。六道（大）でも『火』が使えないからと言って逃げていた。残りの頼みの綱は衛宮だったんだけどあい

つの文字は多分『剣』とかだろ。双剣使ってたし……。だから今のところ『水』を攻略する方法はない。

「日向くん！」

「ん？どうした比良坂？」

名前を呼ばれて反応すると比良坂の頭の上で豆電球がピコーンと発光しているかのように表情を明るくする。それを見て六道も何か思いついたようだ。

「『炎』の文字持つてる人知ってるよ」

「本当か！？」

何やらしい争うノアとミノもそれを聞いて比良坂に注目する。

「シエちゃんの文字が『炎』だったはずだよ。ねえ、六道くん？」

「うん、初日に『炎』の文字で蝕を倒していたから間違いないよ」

「シエって坂崎のことか？」

「うん！」

「……そうだったのか。毎回衛宮と早乙女に守られていたから気づかなかったけど、まさか身近に『炎』の文字が使える人間がいたとは全く知らなかった。まさに灯台下暗しとはこのことだな。」

「あ、でも……」

と言って比良坂は言葉を濁す。

「何か問題でもあるのか？」

「．．．実はシエちゃん、初日に大火傷してて．．．。それから『炎』を怖がって使えないってアヤちゃんが言ってた」

「文字を使いこなせていないのか．．．」

なるほど、衛宮たちが坂崎を守っていた理由はそれか．．．。

「でも今は坂崎に頼るしか方法がないからな」

「．．．．．事実、明日か明後日までには『水』を倒さないと俺たちは全滅する。これは予言なんかじゃなく確定事項だ。きっと負ける。だからこそ俺たちは坂崎の力が必要なんだ。」

「じゃあ、私友達だし私がコンタクトとってみる」

「そうか？じゃあ任せるぞ？」

「うん！」

+ ? + ? +

結局、二日目の『水』は数人の生徒を犠牲にして終わった。グラウンドに行く途中何人が助けていたら、いつの間にか神蝕が終わっていた。

ところ代わって屋上。ここも被害に合ったのだろう血痕の跡が目立つが、それほど量の量でもないので深い傷ではないだろう。

グラウンドを見下ろせば何人か残っている。その中には六道たちの姿もあり、ひとまず安心した。

あの後、すぐに早乙女たちがいた場所に引き返したがそこに二人の姿はなく、かと言って血痕の跡もなかったので部屋に戻ったのだろうと判断し、思考を次の問題に変える。

『水』。まだ目にした蝕はわずかだが厄介な蝕の一つであるのは間違いない。

弓が使えない今、攻撃を与える手段はなく、あつたとしてもダメーヂになるのかは不明。しかも、昨日今日と続けて出てきたのだから明日も現れる可能性は高いと考えた方がいい。

だから、出来るだけ早く今後の対策も考えなければならないな。

「.....はあ」

「こおら、またため息ついている」

小さなため息をつき、何故か注意された。誰が注意したのかは声でわかったが一応後ろを振り返る。

「よかった。早乙女も無事だったんだな」

生きているだろうとは思っていたが、実際こうやって生きているのを確認出来て安堵する。だけど、こんなやり取りをつい先日したは

ずなのに、それがもう随分前に感じるな。

「どうしたんだ、こんなところで？それに坂崎は？」

「しいちゃんはしんどそうだったから今部屋で寝かせてる」

「そっか・・・」

それは特別意外ではなかった。つい最近まで普通に暮らしていた子どもが一転してこんな世界に入ってしまった。むしろ、こんな早くに人が死んでいく環境に慣れた生徒の方が神経を疑う。目の前の早乙女も外見は平常を装っているが、時折見せる顔が今の心情を物語っている。

「それに今はもうお昼の時間過ぎてるのに食堂にも部屋にもいなかったからお腹空いてるんじゃないかなと思って・・・」

右手に持っていたビニール袋を上げて見せつける。もうそんな時間なのかと思って腕時計を見れば一時を回っており、再度グラウンドを見ればほとんどの生徒がいなくなっていた。

「じゃあ、一緒に食べよ」

「ああ、悪いな。ありがとう」

屋上の隅にあるベンチに二人で腰掛ける。ビニール袋の中身を見れば購買で買ったのだろいういくつかのパンが入っていた。そして・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・何これ？」

複数のパンの他にいちご茶なる紙パックのジュースが入っていた。聞けば本当はメロン茶がオススメなのだが購買には売っていなかったらしい。

「．．．．ん？けっこう美味しいな、コレ。」

「それにしても士郎くんが無事でよかった」

「心配かけてゴメンな」

「じゃあ、心配かけたんだから一つお願いしてもいい？」

「．．．お願い？」

俺に出来ることならできるだけやろうとは思う。だけど、早乙女の言うお願いは予想の範疇を超えていた。

「．．．．．もう一回頭を撫でてほしいんだ」

「．．．．．は？」

意表を突かれたそのお願いに変な声が漏れた。

「．．．．．嫌ならいいんだよ？私可愛くないし．．．．。やつぱり迷惑だよね？」

三十センチくらいしか離れていないところで上目遣いでそんなことを言われてドキッとした。

「・・・・・・・・・・いや、ただちよつと意表を突かれただけだ。それに早乙女は自分が思っている以上に可愛いぞ」

実際、好みとかの個人差はあるだろうが早乙女は一般的に見てもレベルは高い。雑誌のモデルとかやってるって言われても十分に納得できるくらいだ。

ただ、やっぱり頭を撫でるのはレンの時くらい恥ずかしかったが意を決して早乙女の頭を撫でた。

「・・・・・・・・・・うん、ありがとう」

一分くらい撫でていたら急に早乙女が顔を上げて礼を言った。それほど嬉しかったのか顔を真っ赤にした早乙女の表情は喜びと満足でいっぱいのように感じた。

・・・・・・・・・・やっぱり乙女心はわからないな。好きでもない男に頭を撫でられることはそんなに嬉しいことなのだろうか？

「私、これで明日も頑張れるから・・・」

「え？」

「・・・うんうん、何でもない。気にしないで」

最後に何か言ったようだが何でもないと言い早乙女は手をブンブンと振っていた。そして、食事も十分程で食べ終えたので、帰りがてら坂崎の様子も見に行くことにした。あと、途中散歩していたレンに見られてこのことについてうるさく追求されたのは後の話だ。

+ ? + ? +

目を覚ませばそこは見慣れた天井があった。そして、ゆっくりと体を起こすと制服のまま寝ていたことに気づいた。きつとあやが無理して運んでくれたのだろう、礼を言おうと思つてカーテンを開けるが部屋の中にあやの姿は見当たらない。

「……………あや？」

名前を呼んでみるがやっぱりいない。とりあえず、風呂場にもいないので礼を言うのは後にして先に汗の匂いを取り除くためにシャワーを浴びることにした。

ブラウスを脱ぎ、自分の右手を注目する。初日、アレは本当に酷い火傷だった。保健室の水島先生も跡が残ると言っていたのに衛宮くんにもらった薬をつけていたら日毎によくなり、今ではほとんどよくなっておりこの調子なら火傷の跡が消えるのも時間の問題である。

「……………いつたい何なんだろう？」

この道のプロである水島先生ですら跡が残ると言っていたものが完治してしまう。嬉しいことではあるが、それと同時に不思議にも思う。

コンコン

そんな物思いにふけっている時にドアをノックする音が聞こえる。

「……………衛宮くん？」

あやは鍵を持っているのでノックは基本的にはしない。それにこの部屋を訪れる人は少なくまた、来るにしても大概が衛宮くんで、例外的に正田エコという女の子がたまに係の伝達に来るくらいだ。

だから、シャワーを浴びるのは中断し、急いで制服を着直す。だが、予想外にノックの次に聞こえたのは女性の声だった。

「坂崎さんいる？」

それは女性ではあるがあやの声ではない。それ以外に女性の知り合いなど思い浮かばないので返事はせず次の言葉を待つ。

「蝕のことで話しがしたいんだけど？」

．．．．．蝕？何で知り合いでもない私と蝕について話し合おうとするのだろうか？そんなことを思っているうちに女性は諦めたように帰っていった。

「坂崎さん？」

そして、一分もしないうちに新たな来訪者が訪れる。今度は男性のようだが衛宮くんのような声ではなかった。

「明日の蝕は君の『炎』がないと倒せないんだ」

「！？」

男性の言葉でようやく悟った。私は今利用されそうになっているんだ。さっきの人もそうするために訪れたんだ。きっとそうに違いはない。だから私は返事はせず毛布に包まった。

「坂崎さんいるんでしょ？出て来てよ！」

「坂崎さん、オレと一緒に『水』やっつけよう？」

「ねえ、お願い。私の話を聞いて！」

「オレ、何でも協力するよ！絶対！！だから出て来て」

「坂崎さんっ！頼れるのは君だけなんだ！！」

代わる代わる人がやって来る。嘘を吐く汚い人間。ただ、自分のことしか頭にないくせに……。

「坂崎さん？」

……うんざりする。また汚い人間が来た。もうかれこれ一時間近く続いている。

「私ね、初日に保健室で坂崎さん見かけてるんだ。すごい火傷してたよね？私その気持ちわかるよ。ねえ、私なら坂崎さんの力になってあげられるよ？」

よくもまあ嘘ばかりつけるものだ。私のことを思っているようでその本質は自分を守りたうだけのくせに……。そもそも、顔も知らない。私の気持ちも知らない。そんな奴が勝手に友達ぶるな！！

「こんにちわー。こちら四組なんだけど。ちょっといい？」

「……………もう……」

．．．．．また来た。

「これからうちのクラスで明日の対策会議するんだ。ぼくらと一緒に来てくれない？」

「知らない！！私には関係ない！！もう来ないで！！」

もう嫌だ。さっさと帰ってほしい。そして、早くあやや衛宮くんに会いたい！

「なあ、正直言って明日はヤバイ」

．．．．．しつこい。

「あんたの力がないとオレら全滅しちゃう」

「なら勝手に全員死ねばいいじゃない！！そんなのどうだっていい！！！！」

汚い人間なんてどうでもいい。私はあやと衛宮くんさえいてくれたらもうどうでもいい。

「．．．なに言っただお前．．．ふざけんな！！いいから出てこいよ！！」

早く帰ってほしいのにどんどんエスカレートする。遂にはドアも蹴

つてきた。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

早く歸つて来て、あや。

「何してるの!？」

ドアの奥から聞き慣れた声。

「お前ら何を考えているんだ？」

そして、会いたかった人たちの声。

その声を聞いた後の行動は早かった。立ち上がり、ドアを開けて飛び出た。途中三人の生徒がいたがそんなの無視して私が求めていた人たちの元に急ぐ。

「しーちゃん!？」

あやに抱きついた。怖かったけど、あやと衛宮くんの姿を見て今まで我慢していたものが一気に崩壊した。

$$\begin{array}{c} + \\ ? \\ + \\ ? \\ + \end{array}$$

士郎ちゃんとレンちゃんと部屋に戻っている最中私の部屋の前に三人の生徒が立っていて、その中の一人の男子生徒がいきなりガンガンと部屋のドアを蹴り始めた。

「何してるの!？」

突然の事態に驚くが、とにかく止めるように促す。すると女子生徒と眼鏡をかけた男子生徒とがこちらに気づき、すぐに蹴るのを止めるように促した。

「お前ら何を考えているんだ？」

士郎くんもそのことについて抗議するが、その言葉の中には怒気が含まれているように感じる。見れば表情も少し怖い。そして、いきなりドアが開きしーちゃんが飛び出して私に抱きついてきた。

「しーちゃん!？」

そのまましーちゃんは崩れて泣き始めた。相当怖い思いをしたのだろう肩が震えている。

「　　ッ!！」

キッとこんな目に合わせた人たちを睨みつける。一瞬ツバの悪そうな顔をするが、それでもまた何か言ってきた。

「.....なあ、今から明日の対策会議するからその子貸してくれないか？なんならあんたらも来てくれて構わない」

この三人は先ほどの行いに謝りもせずそんなことを言う。

「何故四組の会議に俺たちが参加しなければならない？」

短髪の男子生徒の要求に士郎くんが質問で返す。表面上は普通に見

えるがやはりまだ声に怒気が含まれている。

「『水』に対抗するには『炎』の文字の力が必要なんだ」

「ふむ、つまり他に火に関する字を持った生徒が四組にいないからこうして坂崎に白羽の矢をたてたということか」

「ああ、そうだ。理解が早くて助かる」

「彼女は文字を使いこなせていないぞ？」

「．．．それでも構わない」

「だがその要求は呑めないな」

「な！？明日もあの蝕が来るんだぞ！！」

まさか要求を断られるとは思っていなかったのか、士郎くんの答えに三人の生徒が驚く。

「そんなことは知らない。さあ、話は終わりだ。帰ってくれないか？彼女はまだまだ昼食をたべていないしな」

そう言っでこれ見よがしに士郎くんは購買で買ったものを見せる。

「ふざけんな！！」

士郎くんの答えがよほど気にいらなかったのか男子生徒は怒り任せて殴りかかってきた。

「交渉決裂したからといって実力行使か？まあ

」

士郎くんが殴られる直前、目を閉じてしまった。喧嘩なんて見たこともあまりないし、あっても小学生の時だけ。高校生なんてもはや大人なのだから危ないし、士郎くんが傷つくところを見たくないかった。

「がはっ！？」

だが、予想に反して聞こえたのは人を殴った音ではなくてパンツと何かが倒れた音で、続けて殴りかかった生徒の声が聞こえた。

「まあ、実力でも俺はあんたに負けることはない」

目を開ければ倒れた男子生徒を見下ろす士郎くんの姿があった。

「……………つく、と、帳！！」

「……………あ、う、うん」

倒れた男子生徒がもう一人の男子生徒の名前を呼び、その帳と呼ばれた生徒が一瞬遅れて反応する。

その瞬間、あり得ないことが起きた。

「止めておけ」

今まで隣にいたはずの士郎くんが三メートルは離れたところで行動を起こそうとした生徒の後ろに立ち、そのままその生徒の頭を鷲掴みしていた。

この状況に私やしーちゃん、倒れた生徒はもちろん驚愕みされてる生徒自身も驚愕した。

「この場面でバトンが渡され、そして、見た目で判断して悪いけどあんたは武器を持って戦うタイプではない。．．．察するにあんたの文字は対象となる物体を操るものか？」

生徒は口を開けたまま返事はせず、ただ縦に小さく頷いた。

「ふむ、ここで一つ自慢話をしよう」

士郎くんは私たちに凝視されていると言うのに、気にせず何も関係ない話を始めた。

「俺はこう見えて握力はある方だね。この前も友人の前で十センチ程の大きさの石を握り潰したらえらく驚いていたな．．．．．」

この距離からでもわかるくらい眼鏡をかけた生徒が汗をかいているのがわかる。

「石と頭蓋骨、どちらが硬いか試してみる？」

「ひい！ーや、止めてくれ！ー」

「止める！ー！」

今まで倒れていた生徒が立ち上がり文字を具現化する。文字は『戟』。具現化されたそれはまんまハルバートだ。

「二つのハルバート使いとは珍しいな。だが止めておけ。確かに多少の武術の経験はあるようだがわかつているだろ？あんたでは俺には勝てないと」

「うるさい！やって見ないとわからないだろ！！」

今にも衛宮くんに飛び掛かろうとする生徒だが、その前に残りの女子生徒が二人の間に入る。

「．．．引きましよう、辰巳くん。今騒ぎを起こすのはマズいわ。あなたも私たちが帰れば帳くんを開放してくれる？」

「．．．．．本来なら操作系の能力者は危険因子にしなければならないから逃しはしないが、こちら事情が事情だ。去ると言うなら引き止める気はない」

「なら、行きましよう」

女子生徒が眼鏡をかけた男子生徒の手を取って立たせ帰って行く。それに続いてハルバートを持っていた生徒も帰ろうとするが、その際に士郎くんを睨んでいた。

「大丈夫か、坂崎？」

なのに士郎くんは気にした素振りも見せずこちらに近づいてきて心配の声をかける。しかも、士郎くんの表情も優しそうな表情に戻っている。

「う、うん。．．．ありがとう」

その変化にしーちゃんは戸惑いながら礼を言う。そして、そのまま立ち上がるようにするが……………

「……………あ……………」

「どうしたの？」

しーちゃんは顔をうつ伏せて徐々に赤みがる。

「……………安心したらその……………腰抜かしちゃって」

それを聞いた私と士郎くんは目を合わせて笑ってしまった。

「……………うう」

そして、しーちゃんの頬がさらに赤く染まる。あまり見ることができないしーちゃんのこういった一面は非常に愛らしい。

「……………しょうがない」

士郎くんがそんなことをつぶやいたかと思うと、しーちゃんを持ち上げる。……………お姫様抱っこで。

「え、衛宮くん!？」

その行動には私も驚いたが、しーちゃんの顔はもはや林檎のように耳まで真っ赤になってしまっている。

「俺みたいな男にやられるのは嫌だろうけど少しの間でいいから我慢してくれ」

「うん……………」

ああ、いいな……。しーちゃんも可愛いから二人は本当の王子様とお姫様のようだ。というかしーちゃん浮かれすぎて私の事忘れてるんじゃないだろうか？

「早乙女！ドアを開けてくれないか？」

「あ、う……………」

よかった。士郎くんは私の事忘れていなかったみたいだ。まあ、二人に忘れられて一人ぼっちにされたら傷ついて立ち直れなかったかもしれない。

……………あ、レンちゃんいるの忘れてた。

「殻」(後書き)

士郎の口調をどうしようか迷ったけど結局アーチャーみたいな口調にはなりませんでした。・・何か違和感あるけどまあいいか。

「議」（前書き）

祝、総合評価100pt超え！！これも皆さんのおかげです。これからお願いします。

「議」

コンコンと部屋の扉が叩かれる。

それに呼応するかのように坂崎の身体がビクンと反応する。それを早乙女が子どもをあやすかのようにギュッと優しく抱きしめる。

「…………俺が出よう」

さっきみたいに力づくで連れて行こうとする輩がいらないと言い切れないし、そうなると早乙女には荷が重い。

ゆっくり扉を開けるとそこには意外な人物が立っていた。

「…………比良坂か」

そこには同じ一組で坂崎と早乙女と友好関係のある比良坂アイラがいた。その当人はここに俺がいたとは思っていなかったのか鳩が豆鉄砲をくらったような表情をしていた。

「え…………あの……………」

「明日の蝕についてか？」

何か言いたげな様子だったが、このタイミングでここを訪れるということは蝕についてだろうと当たりをつけて問う。その問いに比良坂は「うん…………」とだけ頷いた。

「悪いが今は坂崎は文字が使えない。だから帰ってくれないか？…

・後で俺も日向の部屋に行くから」

「・・・・・・・・わ、わかった。じゃあ、六道くんの部屋にいるね」

「ああ、悪いな・・・」

比良坂は納得してくれたのか、何も聞いて来ずに引き返してくれた。

「誰だったの？」

「ああ、比良坂が俺に明日の蝕について話し合いたいから後で来てくれて言われたただけだ」

早乙女の質問に少しだけ嘘を混じえて答える。すると坂崎が反応し早乙女から少し離れた。

「・・・・・・・・アイラ・・・ちゃんが？」

「ああ。・・・それと比良坂が心配していたぞ。最近会えていないからってな」

「そっか・・・、うん、今度アイラちゃんに会いに行くよ」

このまま部屋に引き込もってしまう恐れがあっただけに、その答えに俺と早乙女は顔はつい笑みを浮かべてしまいう。

「しーちゃん、その時は私も一緒に行っている？」

「うん！もちろんだよ」

先ほどまでとは違う元気な返事。．．うん、この二人はうまくや
つていける気がする。きつとどんな状況になろうとも裏切らず、お
互いを支え合う確かな絆が作られつつある二人ならば確かなパート
ナーになれるだろう。

「じゃあ、俺は今から日向のところに行ってくる」

「え．．う、うん」

俺がこの部屋を出て行く意を伝えると二人はどこか寂しげに頷く。

「大丈夫、明日で『水』は終わる。必ず俺が二人を守るから、早乙
女も坂崎も安心してくれ」

ポンポンと二人の頭を交互に撫で下ろす。

これは自分自身への誓いだ。明日、『水』が倒せなかった
ら坂崎を頼る生徒は激増する。そうなればせっかく安定しつつある
坂崎の精神が再び不安定になるだろう。

故に、明日で神蝕を終わらせなければならぬ。

そう誓いを己の胸に立てて部屋を後にした。

部屋を出た途端、ボンッと二回続けて何かが爆発する音が聞こえた。

+ ? + ? +

士郎が日向の部屋に到着する十分ほど前のこと。

「マジで！？衛宮そんなこと言ってたの？」

「・・・うん。だからシエちゃんの協力はちょっと難しいと思う」

アイラが先ほどのやり取りを伝えるとやはり皆落胆の色を隠せない。
『水』に打ち勝つには『炎』の文字を持つ坂崎だけ。だから、今回の神蝕には坂崎の協力が必要不可欠。

「だけど、えみやんが一度無理って言うとなんか頼みづらいよなあ
・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ミノの言葉にほとんどの者が黙ってしまう。士郎は個人行動が多いため付き合いはこの中でも長いとは言え切れない。だが、それでも友好関係を築いた者として士郎が非と唱えるということは間違いない理由があり、それも問題解決が困難なのだろうと容易に想像がつく。それにその問題も日向たちは知っており、自分たちでは到底解決出来ないのも理解している。だからこそ、皆が口を開くことが出来ないのだ。

「何で頼みづらいんだ？そもそも衛宮って奴に話通さないといけないのか？」

この中で唯一士郎と話したことの無い袴田が口を開く。それに対して日向は「はあ」と大袈裟にため息をつき、無言で軽視の目を向ける。

「な、なんだ！その目は！？俺そんなおかしいこと言ったか？」

「いゝや、イッテマセンヨ？」

「絶対バカにしてんだろ！！」

日向の返事に益々機嫌を悪くした袴田は憤慨するが、そんな袴田に日向は何処吹く風だ。

「……………何騒いでるんだ？」

土郎のいきなりの登場にみんなの視線が一気に玄関にいる土郎に集まる。騒いでいた袴田でさえ、初対面の土郎を前にして急に静かになった。一応この男にも羞恥心はあるんだと日向は密かに思った。

「衛宮くん、早かったね」

黄葉が迎えるために立ち上がり、アイラと日向もそれに続く。

「悪かったな。ノックしたのに返事が返ってこないから勝手に開けてしまった」

「……………気にすんな。バカー一名が騒がしくしてたからな」

「おい！バカつてもしかして俺のことか！？」

「それで今日の会議の内容わかってるか？」

「おい！無視すんな！！」

「ああ。明日の『水』への対策会議だろ？」

「うぐぐ．．．．．」

まるで空気のように無視する日向に非難の声を荒らげるが、日向に続いて士郎までもが何もなかったかのように話す。

黄葉の制止もあつてか、初対面の士郎に対する文句は喉の奥ギリギリでなんとかくい止めた。

もちろん、この後すぐに士郎は袴田と自己紹介をきちんとした。

「それで確認だけど、また明日『水』が来ることは知ってるな？」

日向の問いに士郎は「ああ」とだけ答える。

「それで、『水』を倒すには『炎』の文字が必要なんだが．．．．．
坂崎は出来ないのか？」

「無理だ」

縋るような日向の願いも士郎は間髪容れず拒んだ。

「坂崎は文字を使えない。文字は『経験』と『イメージ』なんだろう？彼女の脳裏には過去の失敗が染み込んでいる。そんな彼女に文字は扱えない。少なくとも俺は許可しない」

士郎は膝の上に寝そべるレンを撫でながら簡潔に理由を話す。その理由に一同本日二度目の沈黙。ここまで言われて尚頼み込むのは厳しいものがある。

「．．．．．じゃあ、どうするんだ？」

場の沈黙を破ったのは日向。というか、みんなが日向に聞いてくれという視線を送ったからこそ日向は口を開いたのだ。

「・・・・・・・・もう一人の六道は『炎』は使えないのか？」

士郎の言うもう一人の六道と言うのは、いつも黄葉のピンチになった時に表に出て来る黄葉とは異なった存在。簡単に言えば遊 王の元祖主人公を思い浮かべてくれればいいだろう。

「あいつは駄目だ。『火』が使えないからって一日中逃げまわってたからな」

「・・・・・・・・そうか」

士郎は右手を顎に添え考える素振りを見せる。その仕草にいたたまれなくなったのか小さな声で「ごめんなさい」とだけつぶやいた。だが、それが聞こえた者は誰もいない。

「・・・・・・・・一つ聞きたいんだけど、『水』は具体的にどうやって倒すんだ？」

「『水』は普通の文字とは違って致命傷を与えれば終わる。だけど、その致命傷を与える方法って言うのが・・・・・・・・」

「・・・・・・・・『炎』か・・・・・・・・」

「そういうことだ」

八方ふさがりとはまさにこの事だろう。『炎』の文字を持つのは坂

崎だけ。だが、肝心の坂崎は『炎』を扱えない。よって、『水』を倒す手段はもうない……。かと思われた。

「……………わかった。俺がなんとかしよう」

士郎のまさかの言葉に、俯きつつあったみんなの顔が一斉に上がる。誰も気づかなかったようだが、レンさえも驚き士郎の顔を見つめていた。

「何か方法があるの？」

黄葉が尋ねる。藁にも縋る思いでいるみんなにとってこの言葉は聞き逃せないものだった？

「俺が『炎』で『水』を倒す」

「ちょっと待て！？お前の文字はなんだ？」

この反応は当然のものだった。何しろ皆が皆士郎の文字は『剣』だと思っていた。いや、士郎の戦う姿を見ると誰もがそう思うのは至極当然。

「俺の文字か？…………俺の文字列は“コレ”だけど……………」

片手がないため士郎は口で器用に袖をまくる。そして、右手に刻まれた文字は皆が予測した通り『剣』だった。

「やっぱり『剣』じゃん！！じゃあ無理だろ！！」

「最後まで話は聞け。例えばだな．．．．．」

士郎が腕を翻し手の平を皆に見える様に見せる。

「ここに一つのナイフがある」

徐々に構成されるナイフに日向は顔を顰めた。

「これ、いつものやつじゃないのか？」

日向の言いつつものやつと言つのは干将だろう。今士郎が持っているのはそれ以上に小さくハンドルは黒い。そして、刀身は見事なまでの鋼色。

「ああ。剣つていうのは主に斬るという用途が一般的だが、別の使い道もある」

「別の使い道？」

「今はライターなんか主流になっているけど、まだそれらが認知される前はこういうナイフが火付けとして使われていたし、俺も実際使っていた」

士郎の場合、厳密にはナイフの付加魔術として火を使用したのだが、あえてそこまでは言わない。そこまで行ってしまうともはや魔術の世界。ただの学生とは形容し難いがそれでも魔術の世界に極力触れさせない方がいいと判断し、そこは伏せておいた。

「使ってたつてお前どういう生活してたんだよ．．．．．」

．．．．．最もな疑問である。

「俺の師匠がめちゃくちな人である森の中に放り出されてさ．．．
．．．結局一年間その森の中で暮らす羽目になったんだ。その時に俺もナイフを火付けとして使ったよ」

森は森でもアから始まる森ではない。例え奥深くに城があつて、その中にたった一つだけ赤い果実のようなものがあつてもきつと違う。いくら馬鹿な師匠でも弟子を間接的に殺そうなんて真似はしない。そんな淡い夢のようなことを思っている士郎。それでもそれは夢ではないのだと士郎はいつか知るだろう。

そんな士郎を見てか、場は．．．．．呆然としていた。正直、皆士郎を少し大人びた学生程度としか思っていたが、あまりの奇想天外な生活っぷりを話されてどこからどう突っ込むべきかわからなかった。

「そ、その．．．よく両親がそういうの許したね？」

誰も口を開けないので、アイラが場の空気をなんとかしようと思いきなり障りのなさそうな事を口にした。だが

「ああ、俺親いないからさ」

どっぴりアウトだった。

悪意も何も箆っていない純粹な返事に撃沈したアイラはもはや返す言葉がない。

「あ、ああ、悪い比良坂。その．．．考えなしに返事してしまって．

「……」

「う、うんうん。こっちこそ変な質問しちゃって……」

もう何度目になるだろうか。空気が重苦しい。絶え間なく続く場の空気の右肩下がりの様はもはや滑稽でしかない。最初から傍観を決め込んでいたレンは心中で「馬鹿ね」と呟いていた。

「……コ、コホン。話が脱線してしまったな」

士郎はわざとらしく咳払いをして場を仕切り直して再び説明に戻る。

「つまり、ここならナイフ一つで火を発火させても不思議じゃないはずだろ？」

日向は考える。確かに士郎はナイフを使って火を起こす経験があり、イメージ力でも言うのか、想像力は人並み外れたものだというのも理解している。それら二つの要因が文字の発動する条件と云えど、ナイフ一つで発火出来るのかは些か疑問であるのが現状であり、それは日向だけではなく他の者もそう考えている。

「まあ、百聞は一見に如かずってな」

士郎はナイフを逆手に持って何も無い空中で何かの文字のようなものを書く。すると、いきなり書いた所から火が発生した。

その光景に目を大きく見開いている者、口を開けて固まった者、ゴシゴシと目を擦って疑っている者と様々であるが、皆一様に言えることは皆が皆マジックを初めて見た子どものように驚いている。

「こんなところだ。これをどうにかして応用化する事で『水』も倒せれると思うぞ」

空中で発火した火の塊をナイフで切るとそのまま火は掻き消えた。

「…………お前めちやくちやだな」

何がどうめちやくちやなのかはわからないが、袴田の感想に皆一様にうんうんと頷いた。むしろ、死んでも生きかえるという袴田自身の方がめちやくちやなのになと思うながら土郎は苦笑した。

「議」(後書き)

長くなるので一旦きります。

「誓」（前書き）

またまたサブタイトル募集です。一応考えているんですがいまいちピンとくるものがなくて・・・どうか助けてください。ちなみに今回も一週間を目処とします。

「誓」

あれから三十分ほど話し合い、結局『水』に対しては衛宮が一任する事で話はまとまった。六道や比良坂が何か手伝えることはないかと尋ねたが、衛宮はただ一言「特にない」と答えた。

「・・・・・・・・さてと」

どっこいしょ、とでも言いたげな感じで立ち上がるところはとても同年代には見えない。

「どこか行くのか？」

「いや、俺食事係だからもうそろそろ行かないと・・・」

・・・・・・・・そう言えばそういう係だったな。腕時計の時間を見ると既に四時半を回っている。

本当にそんな面倒な係じゃなくてよかった。だけど、気のせいだろうか。面倒なはずなのに衛宮の表情はいきいきしてる。そんな気がする。

「・・・・・・・・あ、そうだ」

玄関前で何か思い出したのか、ドアノブに手を掛けたあたりで振り返る。

「一つ頼みたいことがあったんだけどいいか？」

「ん、何だ？」

これはまた珍しいことだと思った。衛宮は人から頼まれるということとはもう何度か見たことはあるが、反対に人に何かを頼むところは一度もなかったからだ。

「明日俺は『水』の迎撃しないといけないから出来れば坂崎と早乙女を守ってくれないか？」

「……案の定、他人事だった。衛宮の頼みごとが何か興味があつたが、俺の予想を裏切つたある意味衛宮らしいお願いだった。

それと六道……。安易に承諾するなよ。俺やお前は誰かを守るところか自分の身さえ守れないんだから結局のところは比良坂やノア任せになるんだからな。

「ああ、ありがとう。じゃあ、また後で……………」

最後に感謝の言葉を置いて、衛宮は部屋を後にした。

「なんだか衛宮君が大人っぽい理由が何となくわかつた気がする」

「……………うん、それには激しく同意。と言うかあんな想像のはるか斜め上を通り過ぎるような生活をすりゃあ否が応でも子供っぽさは抜けるだろうな。

+ ? + ? +

ところ変わって士郎は自室にいる。

「エプロンは用意したし包丁とかは用意されてるしな……………」

「……………」

「今日は一体何の料理を作るんだろう？」

「……………」

「ここの料理人は全員プロ級だからかなり勉強になるな」

「……………」

「……………わかった。降参だ。だから、その目を止めてくれ」

レンは部屋に入るや否や即座に人型に変身した。それだけならいつもの事で特別変わった事ではない。だが、今回は椅子に座って睨むようにジト目で見ていた。

流石の士郎もそれには居心地が悪くなったのか床に腰を下ろして降参のポーズをとる。

「……………マスターはどうやって『水』を倒すつもり？」

重い空気の中、レンが漸く口を開いた。

「それは……………」

「もちろん宝具の真名解放なしでね」

質問に答えようとしたのを遮る形でレンが続ける。そして、その条

件を突き付けられて士郎は沈黙してしまった。

「……………どうせレーヴァンティン辺りを投影して真名解放しようとしたんでしょ？でもマスターはそれに耐えられるの？」

これは無意味な質問だ。投擲用のゲイ・ボルグやシールド系のロー・アイアスならまだしもレーヴァンティンのような放出系の宝具は真名解放してなお、その威力を留めるために支えなければならない。片腕だけの士郎にそれだけの余力はない。そう考えたレンの予想は士郎の沈黙という肯定を以って確証となった。

無い物ねだりしても仕方がないが、もし両腕が健在ならばレーヴァンティンのような高位な宝具を使わなくとも弓でなんとかなるはずだった。

故に、この選択は苦肉の策とも言えよう。

「……………だけど、これは俺がやらないといけない」

そんな答えは知っている。レンは士郎がそう言うのは容易に想像出来た。だが、だからこそレンは我慢がならなかったのだ。

志絵が文字の力を使いこなせない事も十分理解出来るが、そもそも衛宮士郎という存在は楯鹿にとってはイレギュラーな存在。正史ではきつとこの学校にはいなかった生徒。つまり、本来ならばこのような異常事態も士郎の力抜きで乗り切らねばならないのだ。

それが、今回の蝕で間違いなく士郎の魔術は一般生徒までもに露呈することとなる。常軌を逸脱するその力を見れば、頼る者は多くなるだろう。それこそ先程の志絵のように……………。だが、厄介

なことに志絵と違って士郎の場合は二つ返事でOKするのは目に見えている。たとえば、命を賭けたものであっても士郎は首を横には振らない。

そのわかりきった未来に心が潰されるように不安になってしまふ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レンは無言で士郎の膝の上に座る。あまりにもその動作が自然過ぎて士郎にそれを止めることはできなかった。

「・・・・・・・・死なないでね、マスター」

いつもの強気なレンとはまるっきり反対な態度。小さく零した声に士郎は抱擁という返事を返した。そして、レンはその手をギュッと握り返した。

「俺は、絶対に死なないから」

そうして、レンは士郎がこの先を待ち受ける困難を命を賭けて守ろうと改めて心の中で誓いを刻んだ。

+ ? + ? +

夕食も終え、風呂から上がり寝巻きに着替えようとズボンを履き、服を手にとった時にコンコンと小さな音が部屋を響く。この音はドアを叩く音じゃない。今日、嫌と言うほどノックを耳にした志絵は一瞬で気づいた。そして、窓の外に目を移せば見慣れた白い猫がいた。

「レンちゃん？」

着ようとしていた服を一旦側に置いて、下着姿のまま窓を開ける。

ガラツと鳴る音と同時にレンは部屋の中に入って端に除けられていた座布団を陣取った。

「何でここに来たの？」

猫相手に答えが返ってくるなんてあるはずないと思いながらも疑問をぶつけてみた。だが、やはりと言うか、返事は返って来ない。

「何か言った？しーちゃん」

代わりに後ろからルームメイトのあやの声が聞こえる。

志絵が後ろを振り返るとまだ風呂に入っていなかったのか、いつもは結んでいる髪を下ろしたあやが頭だけを出して志絵に声を掛けていた。

「うんうん、別に何でもないよ。ただ、レンちゃんがこの部屋に来たからびっくりしただけ」

「え！？本当？」

あやは下着姿のまま部屋に出て来て、レン姿を捉えるとすぐさま抱き上げた。

「わあ、なんているの？」

いきなりテンションがハイになるあやにレンは内心ちょっと引いていた。あやはレンに相当お熱なのか今はしたないとか恥ずかしいとかいう感情は一切なく、その表情は満面の笑顔だった。

「今日是一緒に寝ようね」

もはやあやの脳内には士郎に届けるという選択肢はないらしい。

その光景を一から十まで見ていた志絵は淡い笑みを浮かべていた。

なぜこの場にレンがいるか？

その答えは士郎とレンの話し合いの末だった。他の一般生徒はともかく、初日から担任を殺してクラスを牛耳る朝長がこのまま引き下がるとは思えなかった。その様な強攻策をとっておきながら、明日行動を起こさない訳がない。よって、護衛の意味を込めてレンを送り込んだ。最初こそはレンも渋っていたが、夜中に行動されて結果あやや志絵が死んだりしたら夢見が悪いし、士郎から頭も下げられた。だから、レンは断ることなどできなかった。ただ

「うーん、レンちゃんあったかいね」

あやがここまでレンを好いているというのは想定範囲外だった。

+ ? + ? +

そして朝がやって来る。

結局、四組も夜中に行動は起こすことはしなかったらしい。あやと

志絵はゆつくりと休息を取れた。

「……………よしッ!」

両サイドに結んだ髪を最後にもう一度鏡で確認してから立ち上がりもう靴を履いている志絵の元に急ぐ。

「おまたせ!」

「うんうん、大丈夫だよ。じゃあ、行こっか?」

「うん!」

今日のあやは頗る機嫌がいい。昨夜のレンの訪問もあるが、何よりも志絵が率先して登校しようとする事が一番の要因である。

こんなに清々しい朝なのだから、今日はきっと何かいい事があるのだろう。何故かそんな期待で胸を膨らまして扉を開ける。

「……………よお、待ってたぜ。裏切り者」

急転直下。物事というのはバランスよく成り立っている。

吉凶もその一つ。吉事が何度も続く訳がない。人の世とは吉事と凶事が交互に舞い降りる。故に彼らが部屋にいるのも必然だったのかもしれない。

+ ? + ? +

誰もいない屋上で、空を見上げる一人の青年。否、この学校に於いては彼は少年として通っている。

一歩前に踏み出せば落下してしまう場所に立っていると云うのに、強く風が吹いても少年の体はぶれることがない。

グラウンドが騒がしくなってきたので視線を下げれば、そこには四組の連中に連れられて来たあやと志絵の姿があった。

いつもの土郎ならば屋上から飛び降りても二人を助けに行っただろう。だが、今回土郎はそれを行動に移さなかった。

一言で言えば信頼しているからだ。二人の傍らにはレンが側にいる。一体四組が二人に何をさせる気かは知らないがレンがいる以上危害を加えられることはないだろう。だから安心してグラウンドを見下ろしていると不意にレンと視線が交差した。それと同時に土郎の周りに小規模な結界が展開される。屋上にはすでに人払いの結界が敷かれているが、それは魔術師なら誰でも出来る簡易的なもの。だが、魔術の才能のないのだ土郎にとってこれ以上の結界は作れない。故に、レンがその代わりを務める。レンが張った結界の概要は認識阻害。これは土郎の結界でもその役割を果たしているが、レンの結界はさらに上級。土郎の結界はなんとなく屋上に行きたくないというだけの認識阻害に対し、レンの結界は土郎の姿を外から見えなくする、所謂視覚阻害。ちょうどマジックミラーと同じ働きをする結界。しかし、最大三メートルほどの大きさしか作れないのが難点でもあるのだが、今回はそれで十分だった。

「トレース・オン
投影、開始」

手に握られるのはかつて世界樹ユグドラシルを滅ぼさんとした炎の魔剣。並々ならぬ魔力が剣を纏う。これならば『水』を倒すことも容易ではあるが、それと同時にこの剣は土郎にとって諸刃の剣。一

度制御を違えば死に至る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それでも土郎は後ろに下がらない。空一面に広がる無数の波紋。そこから大量の敵が現れてもなお直立不動の姿勢を崩さない。

「さあ、『水』の蝕よ。討ち滅ぼされる覚悟は十分か？」

悠然と紡がれる始まりの合図。

この日、檜鹿の少年少女は現代にいる筈のない神秘の使い手を目撃することとなる

「誓」（後書き）

アンケートにご協力お願いします。最近、感想に今後衛宮士郎の腕はどうなるの？という感想が何通か寄せられたので腕は治すべきか治さないべきかアンケートをとろうと思います。一応どちらの場合でもストーリーは組み立てているのですが（頭の中で）今回は思い切って読者のみなさんに聞くことにしました。期限はこちらも一週間。どうかご協力お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2883s/>

正義の味方と神なる力

2011年7月7日00時39分発行